

サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊

高松城跡(西の丸町地区) I

2001. 8

香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第3冊

『高松城跡(西の丸町地区)Ⅰ』正誤表

この用紙をなくす前に書き換えもしくは貼り付けをお願いします。

箇所	誤	正
序文 5行目	サンポート高松整備事業	サンポート高松総合整備事業
序文 8行目	城下	城内
序文 14行目	高松整備局	高松推進局
例言 2行目	サンポート高松整備事業	サンポート高松総合整備事業
例言 4~5行目	江戸時代には城下に含まれ、城の縄張りとしては外曲輪の西北部分に相当する。本来の西ノ丸は本丸の西にあり城内である。	同じ城内であるが、城の縄張りとしては外曲輪の西北部分に相当し、本丸の西に接する本来の西ノ丸とは地点が異なる。
1頁左列 28行目	頼茂	頼重
6頁左列 6行目	西の丸	西の丸町
25頁右列 25行目	前節	第1節
30頁左列 最下行	城下	城内

注意！ 文字のある行を1行とし、広い行間も行として数えないで下さい。

序 文

香川県教育委員会では、四国横断自動車道や高松東道路の建設、高松空港跡地の整備など、大規模開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査と出土文化財の整理研究・報告書刊行の業務を、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して実施しております。

このたび、「サンポート高松整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊」として刊行いたしますのは、平成11・12年度に調査を実施しました高松市西の丸町に所在する高松城跡(西の丸町地区)A地区についてであります。

本地区では、江戸時代の掘立柱建物跡・柵列・溝・石垣などを検出しました。いずれも高松城下の変遷を復元する貴重な遺構で、建物等の方位や位置からある時期を境に土地割りと土地利用が大きく変化したことがわかつてまいりました。

本報告書が本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、県土木部サンポート高松整備局並びに地元関係各位には多大のご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成13年8月

香川県教育委員会

教育長 折原 守

例　言

1. 本報告書は、サンポート高松整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告の第3冊である。本書には、香川県高松市西の丸町に所在する高松城跡（西の丸町地区）A地区の報告を収録した。なお、現在西の丸町となっている行政区画は江戸時代には城下に含まれ、城の縄張りとしては外曲輪の西北部分に相当する。本来の西ノ丸は本丸の西にあり城内である。このため、平成7～12年度に行われたサンポート高松総合整備事業に伴う調査は西の丸町地区或いは西外曲輪と呼び、本来の西ノ丸とは区別している。また現行政区名を指す場合には「」はひらがなで、江戸時代の縄張りを指す場合にはかたかなで表記している。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が県土木部サンポート高松推進局から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査の期間及び担当は以下の通りである。

平成11年度（調査時11G区及び11H区）

平成11年4月1日～6月23日

古野徳久、豊島修、森澤千尋

平成12年度（調査時12F区）

平成12年11月27日～12月22日

古野徳久、黒川和仁、小林明弘

4. 調査にあたっては、次の機関の協力を得た。記して謝意を表したい。

県土木部サンポート高松推進局

5. 報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが行い、編集は古野が担当した。

6. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標系第IV系の北であり、標高はT.P.を基準としている。

7. 本書に用いている遺構記号は次の基準に拠っている。

S B：建物跡（礎石・掘立柱等すべてを含む） S A：櫛列 S P：柱穴（厳密には柱穴以外のものも含む）

S K：土坑 S D：溝 S Z：その他の遺構 S X：遺構であるか判断不能なもの

なお、遺構記号の次に記す「a」は、分冊となる遺跡報告書単位で採用する地区名を表しており、第1分冊にあたる本書収録地区はA地区としたため「a」となる。なお、既刊行の概報は年度単位の調査区名を採用しており同一の遺構でも、本報告書とは遺構番号が異なる（遺構番号対照表参照）。

8. 掘図及び遺物観察表で表現した色調記号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖1992年版」を用いて表す。また、残存率は口縁部の全周に占める割合であり、口縁部が欠ける場合は底部を用い、それ以外は表示を省いた。

目 次

序文

例言

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	4
第3節 整理作業	4
第4節 発掘調査及び整理作業の体制	4

第2章 調査の成果

第1節 基本層序	6
第2節 第1面の遺構	11
第3節 第2面の遺構	14
第4節 第3面の遺構	23
第5節 整地層出土の遺物	26
第6節 包含層出土の遺物	27
第7節 撤乱出土の遺物	29

第3章 まとめ	30
---------	----

遺構番号対照表

遺構別出土遺物一覧

遺物観察表

写真図版

報告書抄録

挿図目次

第1図	遺跡位置図(1).....	2
第2図	遺跡位置図(2)(S=1/1200).....	3
第3図	遺跡土層図作成位置図(S=1/150).....	7
第4図	遺跡土層図(1)(S=1/40).....	8
第5図	遺跡土層図(2)(S=1/40).....	9
第6図	遺跡土層図(3)(S=1/40).....	10
第7図	遺跡土層図(4)(S=1/40).....	10
第8図	主要遺構見取り図(S=1/300).....	11
第9図	12F区遺構配置図(S=1/100).....	12
第10図	11H区遺構配置図(S=1/100).....	13
第11図	S A a01平・断面図(S=1/50).....	14
第12図	S A a01出土遺物実測図(S=1/3).....	15
第13図	S B a01平・断面図(S=1/50)、 出土遺物実測図(S=1/3).....	15
第14図	ピット・土坑平・断面図(S=1/30).....	16
第15図	S P a204平・断面図(S=1/30).....	16
第16図	S K a04断面図(S=1/30)、 出土遺物実測図(S=1/3).....	17
第17図	S K a07出土遺物実測図(S=1/3).....	18
第18図	S K a08・S D a01・S Z a01断面図 (S=1/30).....	19
第19図	S K a08出土遺物実測図(S=1/3).....	20
第20図	S D a01出土遺物実測図(S=1/3).....	21
第21図	S Z a01平・立面図(S=1/30).....	22
第22図	S B a02平・断面図(S=1/50).....	22
第23図	S B a03平・断面図(S=1/50).....	23
第24図	S B a04平・断面図(S=1/50).....	23
第25図	S B a05平・断面図(S=1/50)、 出土遺物実測図(S=1/3).....	24
第26図	S A a02平・断面図(S=1/50)、 出土遺物実測図(S=1/3).....	24
第27図	S P a183平・断面図(S=1/30).....	25
第28図	ピット出土遺物実測図(S=1/3).....	25
第29図	S K a01断面図(S=1/30)、 出土遺物実測図(S=1/3).....	25
第30図	S K a02出土遺物実測図(S=1/3).....	26
第31図	S K a06出土遺物実測図(S=1/3).....	26
第32図	S D a02断面図(S=1/30)、 出土遺物実測図(S=1/3).....	26
第33図	整地層出土遺物実測図(1)(S=1/3).....	27
第34図	整地層出土遺物実測図(2)(S=1/3).....	28
第35図	包含層出土遺物実測図(S=1/3).....	29
第36図	搅乱層出土遺物実測図(S=1/3).....	29

表目次

第1表	遺構番号対照表(1).....	32
第2表	遺構番号対照表(2).....	33
第3表	遺構別出土遺物一覧.....	34
第4表	出土遺物観察表(1).....	35
第5表	出土遺物観察表(2).....	36
第6表	出土遺物観察表(3).....	37
第7表	出土遺物観察表(4).....	38
第8表	出土遺物観察表(5).....	39
第9表	出土遺物観察表(6).....	40

図版目次

図版1	12F区調査終了(北より) 12F区調査終了(北より)	
図版2	12F区遺構完掘 (東より、S D a01より東部分) 12F区 S A a01及び標高0.7mでの 遺構検出状況(東より)	
図版3	11H区第2面調査終了(西より、中央部分) 11H区第2面調査終了(西より、中央部分)	
図版4	11H区第2～3面遺構完掘(西より) 11H区第3面遺構完掘(東から)	
図版5	11H区第3面下位完掘状況(西より) 11H区東壁土層(南端部分)	
図版6	12F区 S A a01土層断面 (南東より、後方杭残存検出) 11H区 S P a190・106礎石等状況(西より)	
図版7	12F区 S P a204土層断面(南より) 12F区 S P a204根石検出(北より)	
図版8	11H区 S P a103土層断面(南より) 11H区 S K a03土層断面(西より) 12F区 S D a01土層断面①(北より)	
図版9	12F区 S D a01土層断面②(北より)	
図版10	12F区 S D a01土層断面③(北より)	
図版11	11H区 S Z a01調査風景(南より) 11H区 S Z a01とS K a08との共存関係 (南より)	
図版12	11H区 S Z a01前面石崩落状況(南より) 11H区 S Z a01石積み状況(東より)	
図版13	11H区 S Z a01北端部(南西より) 11H区 S Z a01裏込め石状況(北より)	
図版14	11H区 S Z a01(北より) 11H区 S Z a01第2面整地後状況(北より)	
図版15	12F区 S Z a01石抜き取り後埋土(南より) 11H区 S P a183柱痕検出(西より)	
図版16	11H区 S P a068詰め石検出(南西より) 11H区 S P a068詰め石・根石状況(西より)	
図版17	11H区 S D a04立面(西より) 11H区 S D a04立面(西より)	
図版18～22	出土遺物(1)～(10)	

第1章 調査の経緯

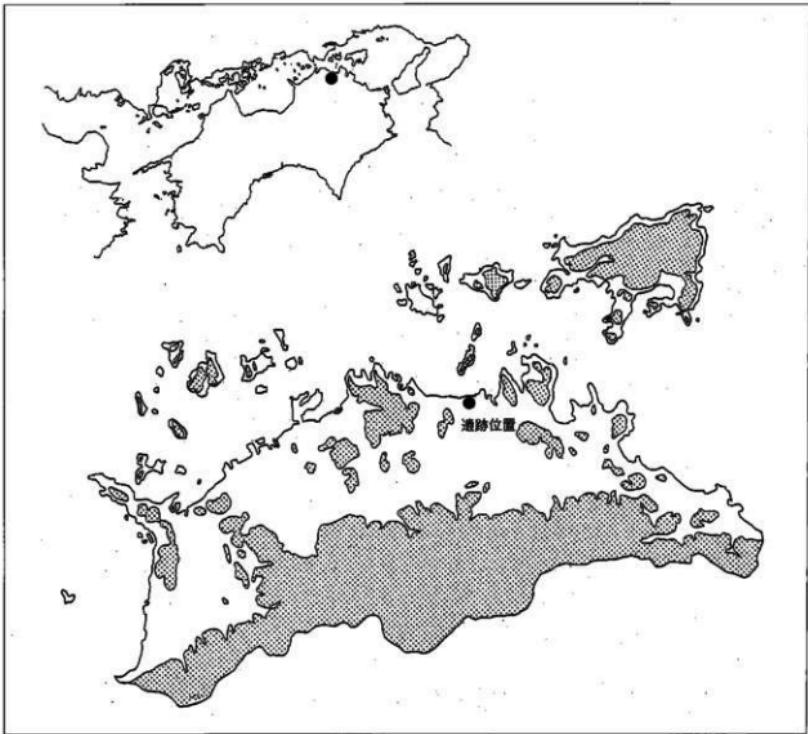
第1節 調査に至る経過

高松市西の丸町における高松城跡の発掘調査は、平成7年度から開始したサンポート高松関係の区画整理事業に始まる。平成11・12年度には、区画整理部の東側に接する都市計画街路高松駅前線の拡幅整備に伴い、西の丸町11-1番地から高松城中堀の南側を東西に走る浜街道に面する14-1番地までの間の発掘調査を実施した。調査は対象地の建物撤去後となるため、サンポート高松の区画整理の調査と時期的な調整を行ないながら時期を分けて実施した。発掘調査は建物の移転が終了した箇所から遺構の残存状況を確認した後、遺構が残存する箇所を対象とし、平成11年度が南部の浜街道との交差点部で390mを、翌平成12年度は北部の280mで実施した。また報告書作成に伴う整理事業は、平成12年度当初は予定していなかったが、サンポート高松整備事業の区画整理区域にあたる浜ノ町遺跡の調査着手時期の一時延期に伴い、高松城跡の都市計画街路部の整理作業を平成12年度12月から3月にかけて行った。

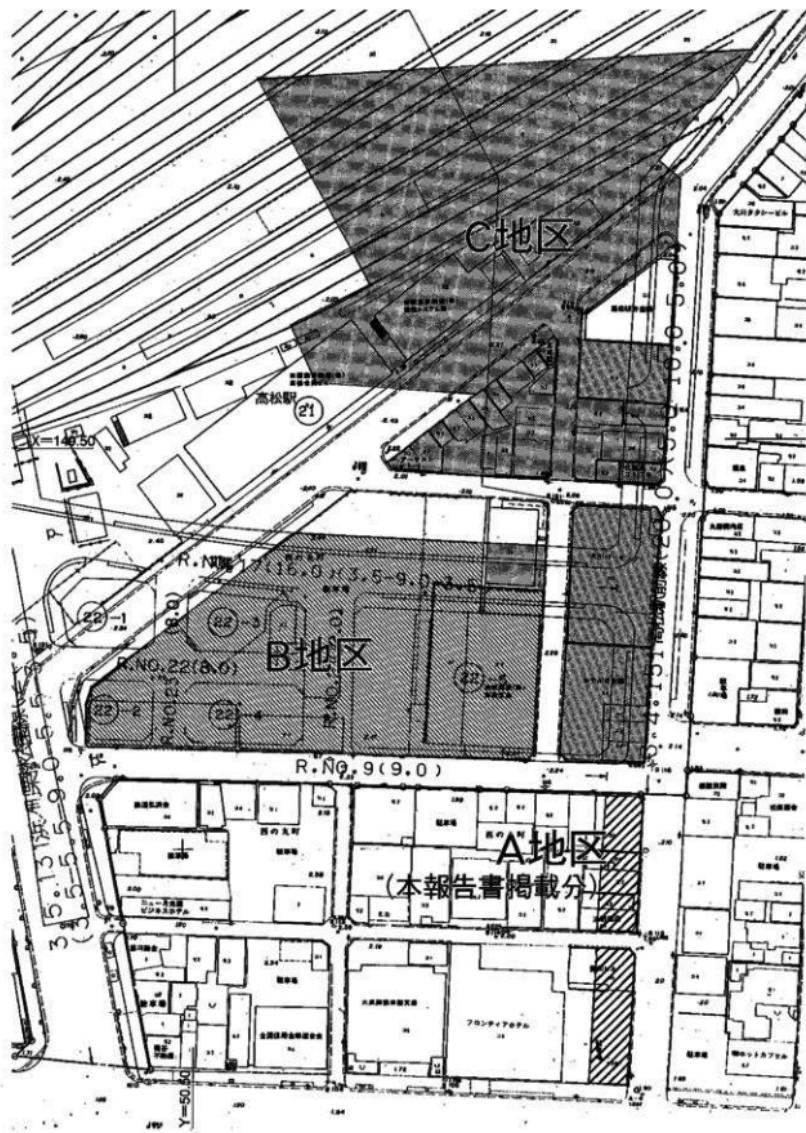
サンポート高松関係を含め西の丸町での発掘調査は、高松城の当時の縄張りからすると中堀と外堀から延びる西浜舟入との間に位置する外郭部に相当する。中郭部と外郭部の出入りは、生駒期の高松城を描いた古城及古戦場図（国会図書館蔵）では帯曲輪の桜馬場中央にある大手門と後の月見櫓及び渡櫓の南側に搦手口が描かれているだけでその他の連絡通路はない。松平期になり初代頼茂の頃まだ東ノ丸が造営される前の状況を示す県指定文化財の高松城下図屏風には生駒期の古城及古戦場図に局方が描かれている箇所が改修され、堀が部分撤去され桜馬場から西へ直進できるようになり、帯曲輪が西にと取移した箇所の北の隅が切られ中堀に橋が架かっている様子が描かれている。屏風絵では帯曲輪の南西の隅はまだ隅櫓（烏櫓）が築かれていらず、設けられた橋の部分もまだ櫓や番所が整っていないように描かれており、改修の過渡的様子がうかがえる。その後東ノ丸が造営され、桜馬場に橋が架かられ、大手門の閉鎖により、桜馬場の役割が大きく変化し、東西に外郭への出入り口が築かれる。東の大鼓櫓口が大手として使用され、その外の外郭に大下馬が、西の出入り口の外には西下馬が設けられたものと考えられる。今回の調査対象地では、生駒期においては中堀に面した通路が設けられ、その内側には家臣の屋敷地が、その後松平期になり橋の設置と共に出入り口が

整備されるとともに屋敷地は大老の大久保家だけが外曲輪の西に設けられ、御門側には出入りに即した施設（西下馬等）の整備がなされる。こうした状況が想定されるが、対象地が高松市の駅前の中心部であることから明治以降の開発がなされており、遺構確認は、かなり難航することが見込まれた。

今回報告する街路区の調査では、南北の方向を持つ石組みの基壇や溝が検出され、生駒期から松平期にかけての様子が明らかになってきたと考えられるが、調査区内では中堀の西側の護岸石垣等は検出できなかつた。サンポートの区画整理部の調査で波止状の石積み構造物を検出したがその位置からすると現在の高松駅前線の道路内に、中堀の西岸は位置するものと考えられる。



第1図 遺跡位置図(1)



第2図 遺跡位置図(2) (S=1/1200)

第2節 調査の経過

今回報告するA区は新高松駅前広場への南からの正面進入路となる県道高松駅前線のために、現道を拡幅することとなり調査が行われた。拡幅は西に10m幅で行われるため、調査もまた東西幅10mとなった。これを交差する道路や現構造物の撤去時期により、3つの小調査区に分けて調査を行っていった。平成11年度にはそのうち、南側の長さ33mの11H区と、それと道路を挟んだ北側6mの11G区を調査した。この年は新高松駅と駅前広場を中心とした地点が主要調査部分であったが、調査準備の整った11H区は4月27日から調査を開始した。調査は直営方式で、面積が狭いため排土は場外搬出となつたものの、排土仮置き場は隣接して確保せねばならず、一度の調査面積は200m²程度と小さなものになつた。調査は順調に進み、作業進捗を

効率的に進めるために主要調査部分にある11C区も5月25日から同時並行で調査を進めた。6月9日には現構造物の撤去の終わった11G区の予備調査を行い、現構造物の基礎による遺跡の消滅を確認したため、これで調査終了とした。6月15日からは仮排土置き場となつていた11H区残り約100m²の調査に入った。ここも8割以上が現構造物の基礎により遺跡が消滅していたため、23日には調査が終了した。

残る12F区は平成12年11月に現構造物の撤去が完了したため、11月27日に調査を開始した。11H区同様の調査方式で行い、こちらも現構造物の基礎により北半分で遺跡が消滅していた。12月22日に調査が終了した。

第3節 整理作業

12F区の調査の終了した平成13年1月から3月の間に行つた。本来であれば、年度当初に整理作業計画を組んでいないため、整理を行わない予定であったが、12年度の当該事業の主要調査対象であった浜ノ町遺跡の調査中大規模な戦後の攪乱を確認したことにより調

査期間が短縮され、残る3月までは平成11・12年度の出土遺構・遺物を対象とした基礎整理及び平成13年度上半期刊行を急ぎたい街路部分の整理作業を前倒して行っていくこととなつた。

第4節 発掘調査及び整理作業の体制

平成11年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

総括 課長 小原克己
課長補佐 小国史郎
副主幹 廣瀬常雄

総務 係長 中村積伸
主査 三宅陽子
主査 松村崇史
埋蔵文化財係長 西村尋文
文化財専門員 森 格也
主任技師 塩崎誠司

次長 川原裕章
総務 副主幹兼係長 六車正憲
副主幹兼係長 田中秀文
主任主任 主事 細川信哉
調査 参事 長尾重盛
主任文化財専門員 藤好史郎
文化財専門員 古野徳久
主任技師 豊島 修
調査技術員 森澤千尋

平成12年度

香川県教育委員会事務局文化行政課

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括 所長 菅原良弘

総括 課長 小原克己
課長補佐 小国史郎
副主幹 廣瀬常雄

総務	係長	中村禎伸
	主査	三宅陽子
	主任	亀田幸一
埋蔵文化財	係長	西岡達哉
	文化財専門員	森 格也
	文化財専門員	宮崎哲也

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

総括	所長	菅原良弘（～10.31）
		小原克己（11.1～、兼務）
	次長	川原裕章
総務	副主幹	大西誠治
	副主幹兼係長	六車正憲
	主任主事	高木康晴
調査	参考事	長尾重盛
	主任文化財専門員	藤好史郎
	文化財専門員	黒川和仁
	文化財専門員	古野徳久
	主任技師	小林明弘

調査・整理に携わった方々は以下のとおりである。

作業員

多田敏夫、川田悦子、久利文子、富田英三、三谷恵子、土居智江子、清水節子、藤井サヨ子、杉山周二、山本秀雄、百歩静子、松本悦子、井下美佐子、中原トヨ子、井下ミチ子、塙原進、高橋美佐子、岡田カネ子、百姓享子、中村芳子、長山キミエ、渡辺喜彦、元山富子、糸目八重子、串田光子、高木輝男、高木ミチ子、影山弘、大塚純司、塙本隆、柏原法雄、松本康弘、北迫高男、林俊雄、満丸文二、上原光世、辻上トミ子、西村和代、満丸香代子、宮地恵美子、西崎文子、林テル子、堀上幸子、網谷チズ子、松本和子、日下千鶴子、宮武和子、今井由紀子

現場整理作業員

高澤由起子、小笠原千恵子

整理作業員

東條俊子、久保真由美

第2章 調査の成果

第1節 基本層序（第3～7図）

高松城跡（西の丸町地区）の調査は平成7年度から開始された。これ以前には高松城関係の大規模な調査は本丸の東にある東ノ丸が中心であったため、距離の離れた東ノ丸での層位関係を援用して西の丸地区の調査を行うことは不可能であった。このため当初は礫石の存在による遺構面の把握から始め、以下遺構の掘り込み面や層位を把握していきながら、遺構面の存在をおさえていった。平成8年度の調査によりその把握はおおよそ完成し、それらは年度の概報に記されている。

今回報告する箇所は、平成11・12年度に調査が行われたため、平成8年度の成果を用いて調査を進めた。しかし、平成8年度の層位と完全には整合せず、土層の境による遺構面の想定を行なながら実際には標高で記録を残していく。これはまた整理作業時に調査時の遺構面の同定がまちがっていることが判明した場合を考慮したことでもあった。

整理段階に至り、改めて平成7・8年度調査地と層位の比較検討を行ったが、整地による土の堆積に起因して隣接した場所でありながら用いた土が著しく異なることが明らかになり、結局完全な一致をみなかつた。そこでやはり将来的な再検討を考慮し、今回報告する箇所のみの遺構面の認定をまず行い、それに従って遺構や遺構の変遷の報告をすることにし、最後にその結果による遺構面の時期と基準層の把握とから平成8年度概報の遺構面との整合を検討してみることにする。

以下、各地点毎に層序の記述を行っていく。

①・②12F区・11H区東壁

(第3～5図、土層位置①・②)

1層とした調査前に存在した建物による搅乱は深いところで標高0.9mの範囲まで及ぶが、面的には1.5mを境とする。この下には2・3層とした疊と粘土質を交互に敷き並べた厚さ20cmの整地単位がある。これは11H区中央畦東端でも認められることから一定の範囲に広がることがわかる一方で、11H区南壁や掲載していないが12F区西壁には認められないことから、12F区・11H区の東側にのみ存在したことがわかる。遺物はほとんど出土していないが、恐らく12F区・11H区東の現道路に関わるような近代以降の整地単位と考える。

4層以下を幕末までの層と考えたが、これは3層と

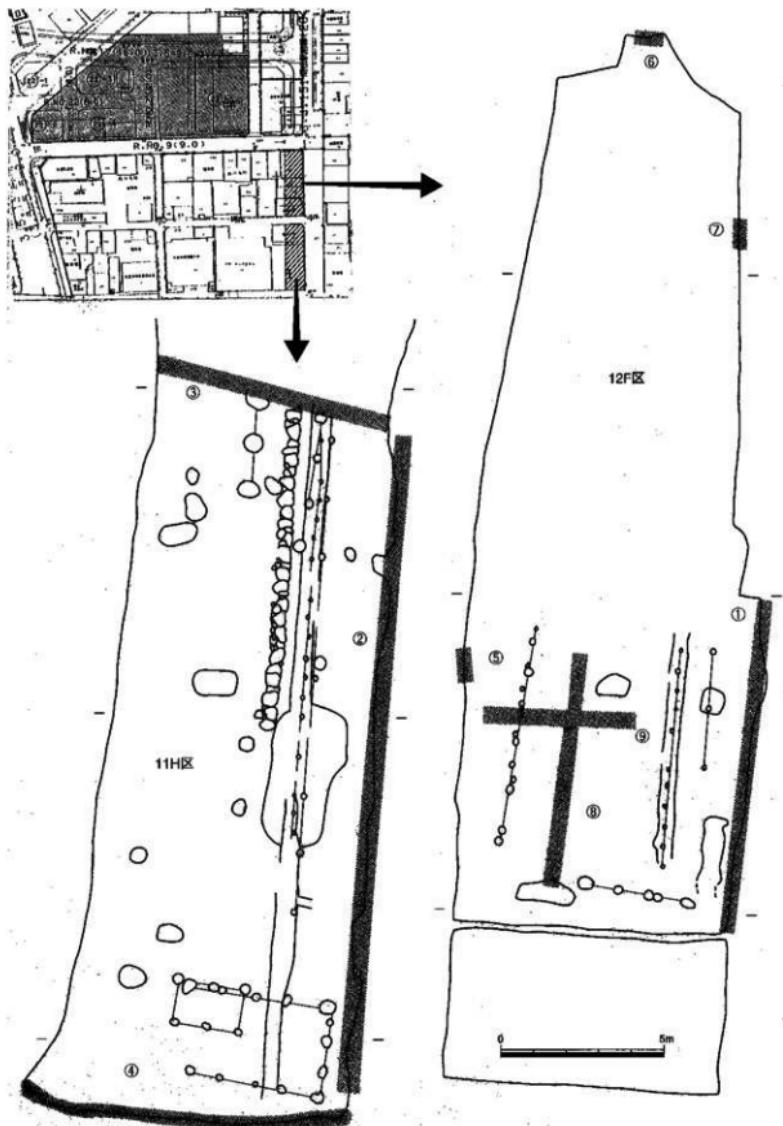
の間に堆積層全体の中で最も大きな差異が存在することと、わずかな層出土遺物の中には近代以降のものが含まれていないことによる。11H区南壁では類似する層が1.45mの高さまで残る。今調査区ではこれが近代の層が最も高くまで残っている部分である。従って、この高さ以上に幕末の遺構面が存在したことになる。これを第1面とする。

4～7層は柔らかい砂質土で構成され、その間に薄く5や6層が挟まれる。全体としては分かちがたく堆積するため、これを一つの整地単位と考える。11H区部分でこれに対応するのは22～26・33層である。23層には炭・焼土が混じる。33層下部にも炭の層が塊状に走る。42層は22層上面から掘り込まれた大型の土坑状を呈するが、平面的には遺構として検出していない。21層はこの面から掘り込まれている土坑の埋土で疊を多量に含んでいた。

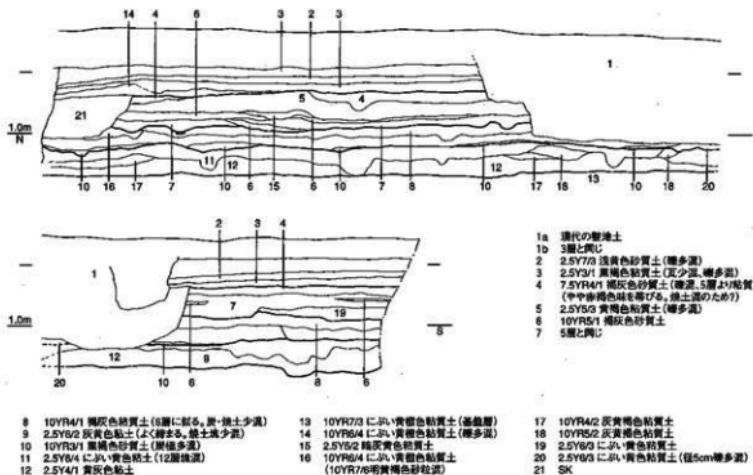
この下の標高1～1.1mが次の遺構面となる。これを第2面とする。構成層の8層には炭や焼土が含まれる。この下の9層は白みを帯びよく締まっており、やはり焼土が含まれる。同じ土質であり焼土を共通に含むことから、ここまでを整地単位と考える。11H区部分でこれに対応するのは27・28層である。

12F区で特徴的なのは10層である。ほぼ純粋な炭層で、ここで木が燃えた痕跡であるとすればその面的な広がりから、火災を示している可能性が高い。よってこの下、11層上面が遺構面となり、これを第3面とする。8・9層に含まれる焼土がこの火災により焼失した家屋の壁等の土であるとすれば、両層は火災をきっかけに整地を行った土であり、その結果9層上面が新しい地面となったという解釈が可能となる。

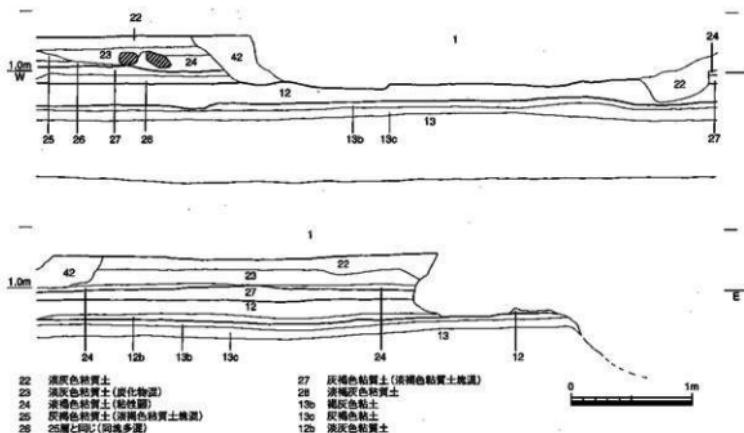
11層は下位の12層の土をブロックで多く含んだ整地層である。一方、12層は粘性の高い自然堆積による包含層であり、この上面が整地が始まる直前の遺構面となる。しかしこの面は凹凸が著しく、単純に遺構削面とはみなしがたい。12F区では12層内にS X a02やS X a03とした南北方向の溝状の自然の窪みの単位が存在したりと、この包含層の時期には12F区は微妙な低地であり遺構は見あたらなかったのではないだろうか。12層は土器細片を割と含むことから、恐らく居住域縁辺にあたるのであろう。そして11層にはこの凹凸のある低地をならす際に削られた12層の土が含まれており、第3面で人間の直接の居住が最初に行われたと



第3図 道路土層図作成位置図 (S=1/150)

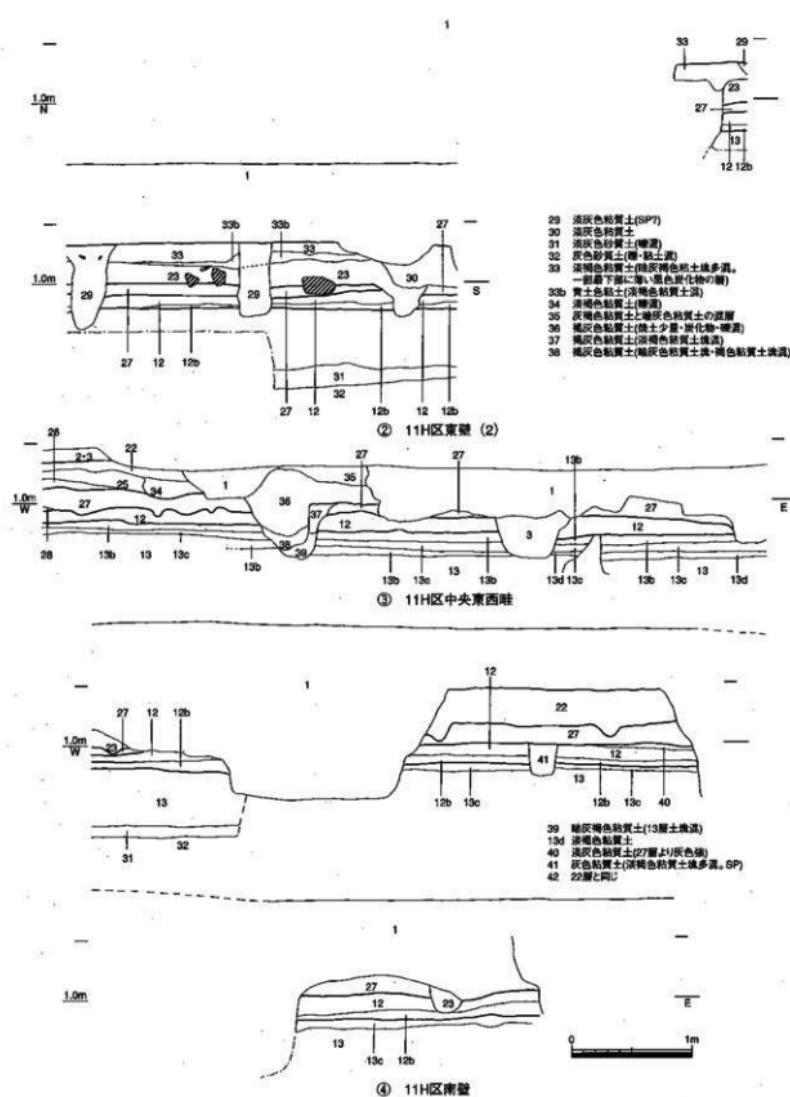


① 12F区 東壁

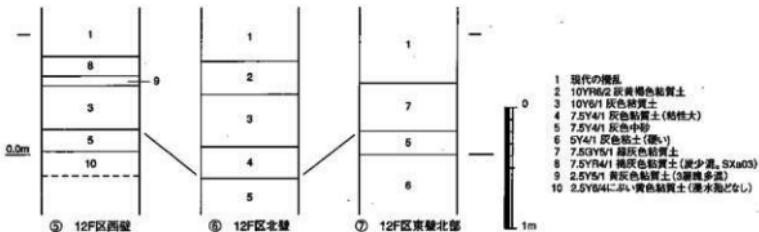


② 11H区 東壁(1)

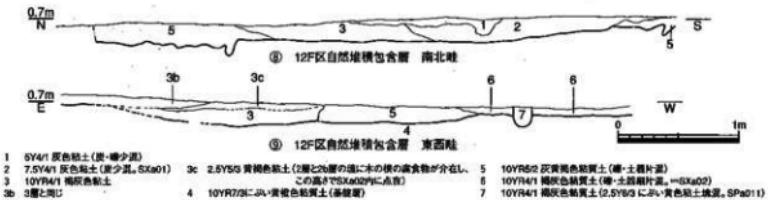
第4図 遺跡土層図 (1) (S=1/40)



第5図 遺跡土層図(2)(S=1/40)



第6図 遺跡土層図(3)(S=1/40)



第7図 遺跡土層図(4)(S=1/40)

いう解釈をしておきたい。但し、11H区では11層がなく12層上面が平坦である。13層上面の標高が11H区では0.7mで12F区より20cmも高いことから、ここが低地でなく居住可能な遺構面であり、整地が行われず直接第3面となったのであろう。

13層の堆積により冲積作用が終了し、調査地周辺が陸地化した。13層内にも古代以前の土器細片が含まれる。

③11H区中央東西壁(第3・5図、土層位置③)

11H区は調査前に存在した建物による擾乱のため北側半分は遺構面が残っていないかった。そのためこの部分で東西方向の土層図を作成した。

整地土・包含層の堆積状況とも、11H区東壁と同じである。S Z a01は抜き取られている。27層の存在はS Z a01の東西で変わらないが、それより上は比較できない。S D a01は36層の状況から第1面へと整地する際に埋め立てられたことになる。36層は膠や焼土・炭の混じり方も第1-2面間の整地土と共通している。

④11H区南壁(第3・5図、土層位置④)

整地土・包含層の堆積状況はほぼ11H区東壁と同じである。しかし、東端より2m付近の擾乱を境に第2及び3面の標高が異なる。東側は11H区東壁と変わら

ないが、西側は第3面が10cm、第2面が20cm遺構面が高い。第3面は自然堆積包含層の上であり、基本的には整地を行っていない。第3面でも自然の地形の影響による高低が均されずにそのまま存在したのかもしれない。第2面は東西の標高差が更に大きくなる。この原因も明らかでない。これらについては面的にその広がりや高低の段の境を検出し得ていないため、これ以上は明らかにできない。この高低を利用して東と西とで土地利用に差があったことも想定したが、掘立柱建物跡の存在はそれを否定する。また第2面は擾乱部分にS D a01やS Z a01が延びてくることが何らかの関わりとなって土地利用の差が明確になった可能性を検討したが、それぞれの遺構説明で記したようにS D a01は整地時には存在してなく、S Z a01は南壁までは延びないと考えている。

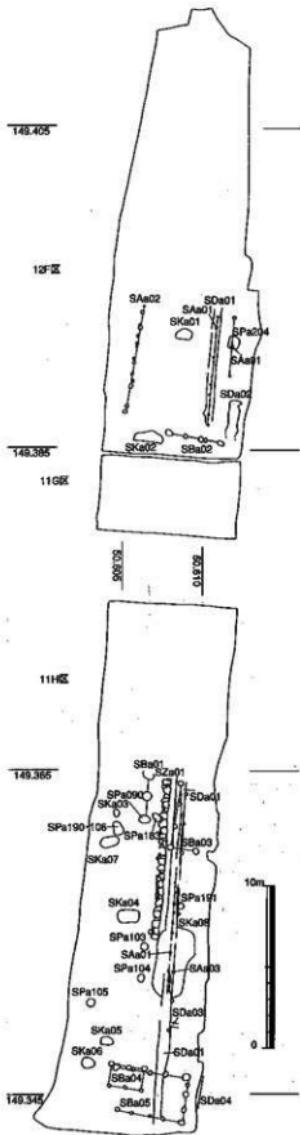
41層は第3面より掘り込まれたピットの埋土である。

13層の下位では標高0.3mで膠を多く含んだ砂質土が現れる。

⑤~⑦12F区土層柱状図

(第3・6図、土層位置⑤~⑦)

12F区も調査対象地の北半分に建物基礎による破壊が深くまで及び遺構面が残されていなかった。それより下の自然堆積層の状況だけでも把握しようとして、3本



第8図 主要構造見取り図 (S=1/300)

のトレンチを設定した。

3層は第4図13層と同じ自然堆積層である。2・7層も自然堆積層であり、7層は1層の影響でそれが青く変色している。8・9層は第4図12層と同じ自然堆積包含層である。以上から、12F区西側では沖積作用終了後の地面の標高が0.57mであり、破壊されていない部分と同じであるが、南端では0.77mとその標高が高くなるようである。一方、3層下には藻層(5層)が存在し、標高0.9mあたりが弱水面になる。

⑧ · ⑨ 12F区自然堆积包含层壁

(第3・7図、土層位置⑧・⑨)

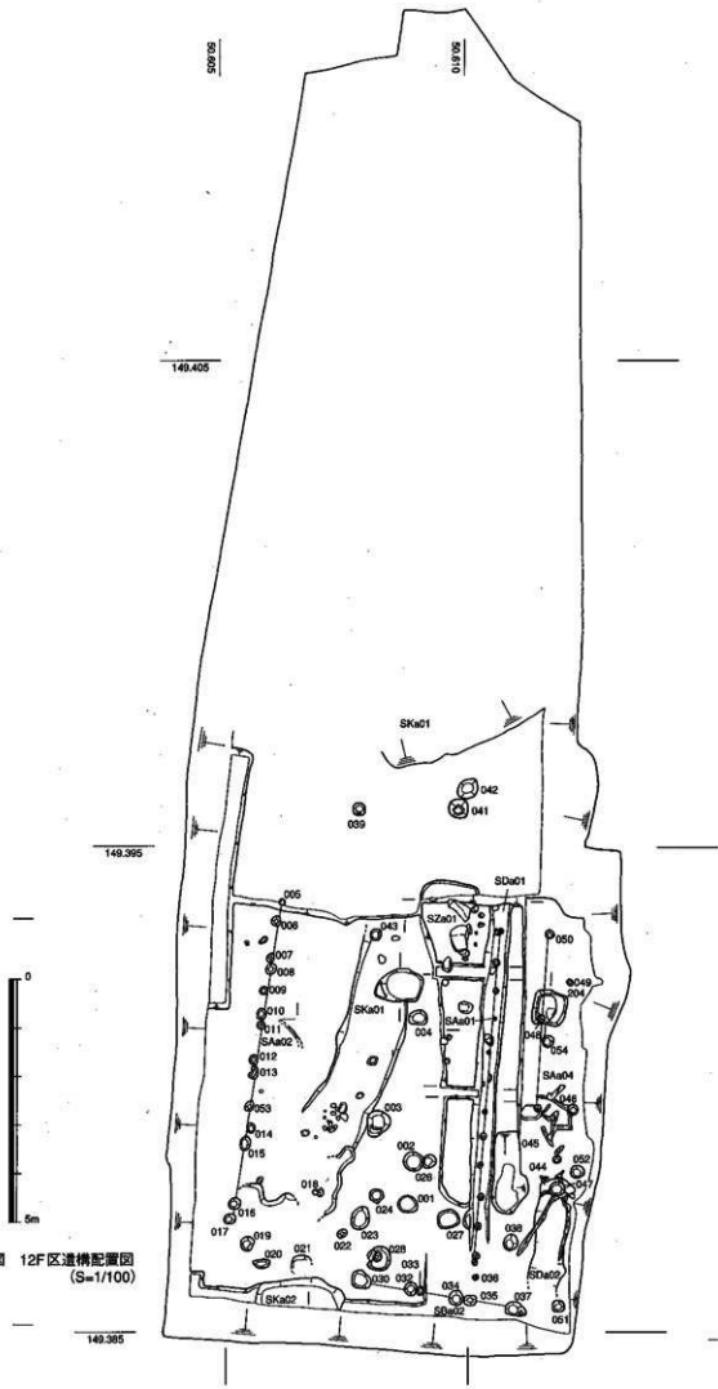
先述したように12F区内では第4回12層内にSX-a02やSX-a03とした南北方向の溝状の自然の窪みの単位が存在したりと、この包含層の時期には12F区は微妙な低地であったと想定した。この図で示した1~3・5・6層はいずれも12層の範疇で捉えられる層である。微妙な色や質の違いにより区分され、堆積が一様ではなかったことを示している。2層と2b層の間に木の根の腐植物が水平に延び、12F区東半分に点在する。12F区南東隅ではこれが顯著に残っていた。ある時期この一帯に木が生えていた状況があったのであらうか。

第2節 第1面の遺構

S A a01 (第8~12図、図版2・6・10)

12F区・11H区両地点で検出した欄列である。N 04° E の方位を向く。S Da01の中央位置に沿って、約60cmの等間隔で打たれている。溝埋立後のどの時期に打たれたのかわからぬ。第5図③によればS Da01が埋め立てられると同時に整地による嵩上げが行われている。従って一見坑は溝とは関わりなく打たれたことになる。しかし土層の境としては見えなくとも溝だけ理立て整地前に一休止したとすれば、その時点で溝に沿って打つことはできる。また一気に埋め立てられたとしても、SDa01以外にこの位置を境界として示す何らかの標識を備えていれば、溝の位置がわからずとも打つことはできる。整地と欄列設置の間の時間を大きくとるほど、杭と溝の重なりは偶然性が高くなるものの、しかしそれでもかつてそこに境界があったという意識の故に両者が結ばれているということはいえる。逆に全くの偶然というのは非常に考えづらい。ここでは溝と杭の重なりが偶然ではない可能性を重視したい。

杭は差し込む穴を掘ることなく、直接打ち込んでい

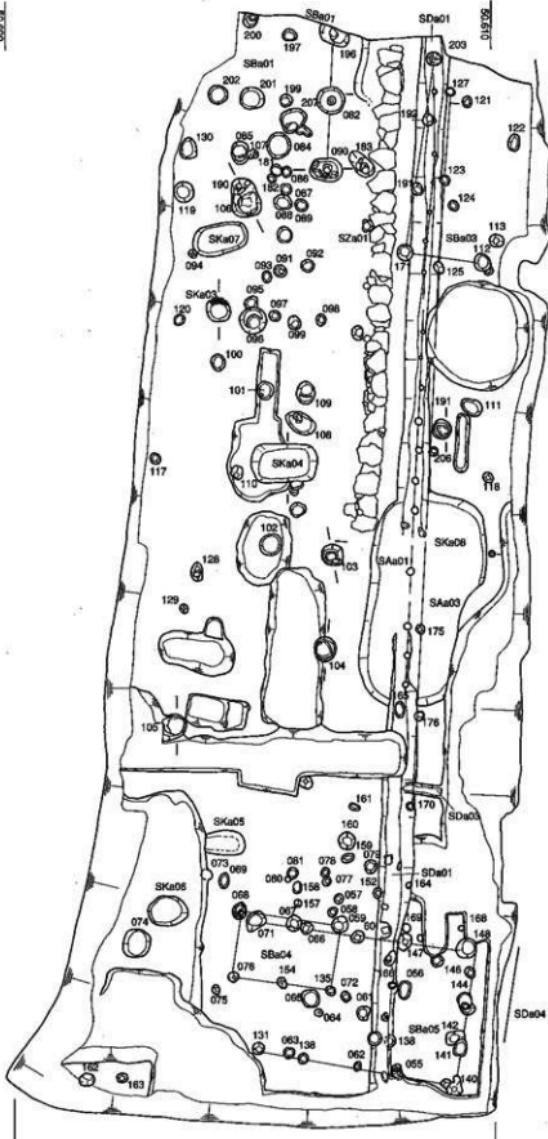


第9図 12F区構造配置図
(S=1/100)

149.365

- 12 -

0
5m



第10図 11H区遺構配図 (S=1/100)

る。これは断面で掘り形が存在しなかったこと、残っていた杭1も径5cm以下でピット径に一致し杭先も打ち込み用に尖らせていること、この程度の杭であれば打ち込むのも簡単であることから判断した。またこのことから打ち込んでたりる簡易な構であり、実際一直線上から多少ずれているところもある。

整地と柵列設置の間の時間幅に関わらず柵列を設置したということは、ここにSDa01によった境界がこの時点でもあることを示している。つまりこの溝を埋め大きく土地の嵩上げをする第1面への区画整理はSDa01による境界を踏まえて行われたと考える。

この他布掘りの可能性も検討したが、簡易な柵列には不釣り合いであり、第5図③による限り埋立後は高くなり、通常の布掘りの掘り形とは見なしがたい。

1は12F区の北から9つ目のピットで検出した。枝は小さな木のまで全て刃物で刈り取り払われている。また根元は斜めに尖せている。枝の払われた位置は直線上にあり、本来は枝の付け根まで払っていたものが地中にある内に表面から削り現状の形にやせたものと考える。このため表皮もない。刈り払いの位置から5cm前後の径の杭に復元できる。掘り形がないため、当然他には遺物の出土はない。

SAa01は第1面整地過程もしくは第1面に属する。

SAa04(第8・9図)

12F区南東部で検出した。N04°Eの方位を向く。第1面である4層上面で検出した。ピットを3つないだのみであるが、1.8mの等間隔で同じ20cmの穴が開きかつ第1面の方位に合致するため、柵であると判断した。SAa01との関係は不明である。

第3節 第2面の遺構

SBa01(第8・10・13・14図、図版3・4)

11H区北西部で検出した。2間の柱1列のみであり東西どちらにも展開しないが、柵列とするには穴が大きいため掘立柱建物跡とした。北側に更に延びる可能性は高い。N04°Eの方位を向く。柱間は14m。北

のピットには根石を据え、南のピットでは立てた柱を囲むように石を詰めている状態がピットの西北部で認められる。2はSPa082出土遺物である。白磁の碗で体部と口縁の境に棱を持ち、口縁端へと直立する。内面下端は見込みと体部の境の段が残る。内外面とも施釉される。あまり類例のない形態で時期判断が難しいが、中世以前であろう。図示した他に平瓦や備前焼等の細片が出土している。2は混入であり、他の遺物も遺構の時期を決定することはできない。標高1.1m前後で検出しており、掘り込み面は第2面とする。

SAa03(第8・10図、図版4・14)

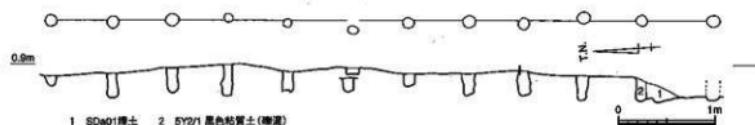
11H区東部で検出した。N04°Eの方位を向く。SDa01の東肩口の位置に同じ方向に向かって1.8m間隔で打たれる。ピットからは須恵器細片が1点出土したのみである。ピットはSDa01に切られておりそれより古く、SKa08より新しい。また北より4つ目のピットを標高1.1mで確認できており、この結果第2面に属する。つまり第2面整地直後にはSDa01ではなく、まずSKa08があり、その後SAa03が打たれたということになる。SAa03はピット径も20cmあり、穴に柱を立てたものとしてSAa01のような簡易な柵列ではないとみる。第2面整地直後にはSZa01も掘れられているので、両者は共存する時期が確実に存在するものの、SAa03は12F区まで延びないため部分的な設置と見ている。

SPa190(第8・10・14図、図版3・4・6)

11H区北部で検出した。SPa106を調査中に検出し、当初は礎石を据える掘り形の一部かと考えたが、SPa068同様柱用の空間とその周囲に詰め石を検出したため、単独の柱穴として認識した。中からは遺物は出土していない。標高1.1mで検出したため、第2面に属する。

SPa106(第8・10・14図、図版3・4・6)

SPa190の南に接して検出した。穴に巨石を据えている。石上面は標高1.2m弱のため、第2面に伴う礎石であると判断した。しかしSPa103等のような安定



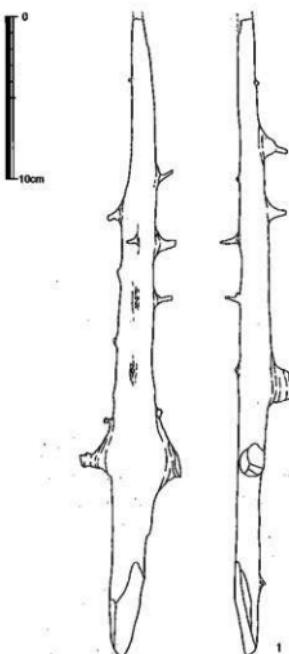
第11図 SAa01平・断面図(S=1/50)

した平石でなく、上の平坦面は狭い。礎石は12F・11H区ではこれのみであり、用途等は明らかでない。柱穴内から遺物は出土していない。

S Pa090 (第8・10・14図、図版3・4)

11H区北部で検出した。S Ba01の南端を構成する柱穴として取り上げている。北西の空間部分に直柱を

建てその回りに礎を詰めていたのか、中央の平石の上に柱を建てたのか判断できない。前者だと詰め石を平たい面を上にしておくのは不自然である。後者では掘り形の割りに平石が小さい。深い柱穴も調査時に掘りすぎた可能性を否定できない。柱穴内から遺物は出土していない。S Ba01の柱穴として第2面に属すると考える。



第12図 S Aa01出土遺物実測図 (S=1/3)

S Pa191 (第8・10・14図、図版4・12・14)

11H区中部で検出した。S Da01のすぐ東に接する。S Pa103等と同じ形態の掘り形・平石をもつが、同一造構を構成する要素は他に見いだせなかった。柱穴内から瓦器と土師器の細片が少量出土している。標高1.1mで検出したため第2面に属すると判断した。

S Pa103 (第8・10・14図、図版3・8)

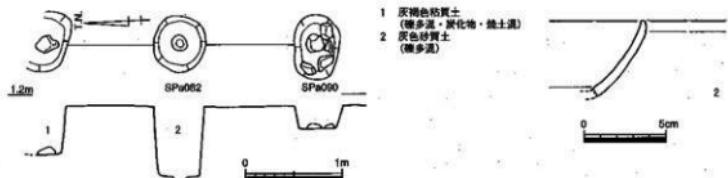
11H区中部で検出した。深さ70cmの穴の底に穴っぽは同じ大きさの平石を落とし込んで据えている。上部にやや大きめの柱や重たいものを載せても沈まずに耐えられるようになっていると思われる。柱の掘り形の形状をみても、重要な柱穴であることは間違いない。2面に属することはS Za01の項で明らかにした。土師器や備前焼・平瓦の細片が出土している。

S Pa104 (第8・10・14図、図版3)

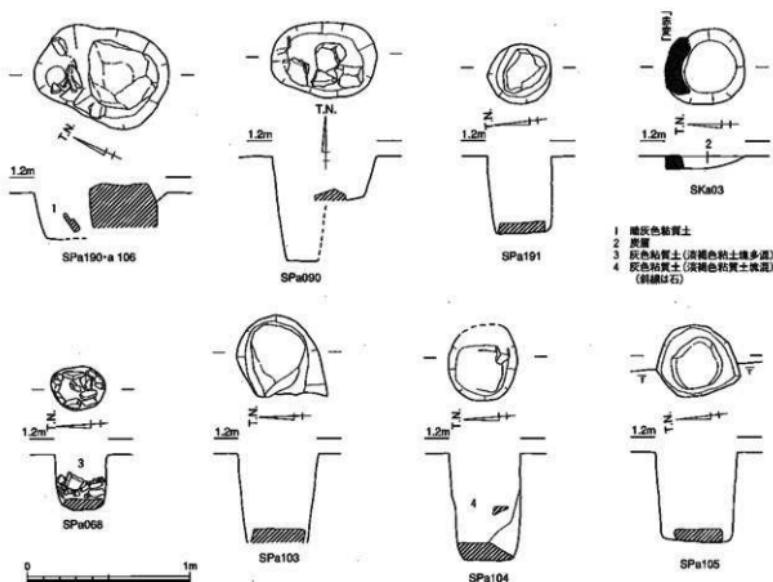
11H区S Pa103の南で検出した。SKa08やS Za01の項で取り上げてきたように、S Pa103と対になる可能性が高い。深さは10cm異なるが、同じ形態の掘り形・平石からも、妥当な判断と考える。この場合柱穴間の距離は1.9mになる。土師器細片が少量出土した。

S Pa105 (第8・10・14図、図版3)

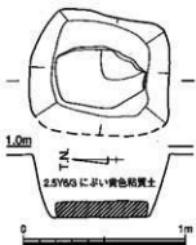
11H区南部で検出した。S Pa103等と同じ形態の掘り形・平石をもつが、他に近接して同一造構を構成するピットは検出できていない。柱穴内から土師器等の細片が少量出土している。標高1.1mで検出したため第2面に属すると判断した。



第13図 S Ba01平・断面図 (S=1/50)、出土遺物実測図 (S=1/3)



第14図 ピット・土坑平・断面図 (S=1/30)



第15図 S190-4平・断面図 (S=1/30)

S190-4 (第8・9・15図、図版1・7)

12F区で検出した。隅丸方形の大きな穴の底に大きな平たい石を据えている。S190-3～105（第14図）と共に通する形態で、おそらく石を根石としてその上に大きな柱が立つものと思われるが、調査区内ではこれと関連するような遺構は他に見付けていない。ピット内からは土師器や土師質土鍋などの土器片が出土している。この地点での9層上面とした標高0.96mで検出

しており、第2面と第3面の間にもう1面遺構面が存在する可能性を示唆するが、第1節の基本層序の検討結果と矛盾するため、ここでは第2面である8層から掘り込まれているものを検出できなかったことによると考えておきたい。

SKa03 (第8・10・14図、図版3・8)

11H区で検出した。径50cmの浅い穴で、中には炭がつまっていた。穴の北側は幅40cm弱が熱により赤変・硬化していた。以上の結果、南側を焚き口として穴の北壁際で火を燃やし、燃え殻が炭として残っていたと考える。ただし、壁のみで穴の底が焼けていないのが気にかかる。周辺ではこれと関わるような遺構は他に見付けていない。遺物は出土していない。検出した標高から、第2面以上の面に属する。

SKa04 (第8・10・16図、図版3・4・14)

11H区中部で検出した。0.8×1.6mの楕円形の土坑である。長軸は第2面以上の遺構の方位と直交しているように見える。土器片の出土が多く、土師器や備前焼・瀬戸美濃陶器？・平瓦・白磁などがある。3は土

師器小皿の底で底部を静止糸切りしている。4は陶器の徳利で胎土は灰色を呈する。外面底部直上まで濃い、内面上部まで薄い褐釉をかける。底部直上は釉剥離をしている。西日本に産地を持つと思われ、備前焼の糸目徳利を意識して作られている。17~18世紀前半に属する。これらは摩滅してなく、遺構の時期を示すと考える。検出した標高から、第2面以上の面に属する。

S Ka07 (第8・10・17図、図版3)

11H区中部で検出した。0.6×1.1mの楕円形土坑である。深さは10cmもなく浅い。埋土は灰茶色粘質土で焼土を含んでいる。中からは圓化したものの他に土師器細片が2点出土した。5は土師質の擂鉢で5条1単位の御し目が入れられる。内面底及び割れ口とその内側面に煤が付着している。埋土の焼土と関係するものかもしれない。胎土は今報告の土師質土器と共通し、金雲母を多量に含むのが特徴的であり、在地産と考える。6は備前焼の壺である。自然釉が厚くかぶさる。5条1単位の波状文と4条1単位の直線文が拂で描かれる。S Ka07は標高1.1mで検出しておらず、第2面以上の面に属する。土坑の長軸は第2面・第3面の方位とも関係しない。

S Ka08 (第8・10・18・19図、図版3・11・12・14)

11H区中部で検出した24×44mの大型の土坑である。第18図断面⑥ではS Da01より古い。一方この北40cmの地点で撮影した図版11上下ではS Za01からS Ka08の西脇斜面に沿ってS Za01の一部である石が並んでいる。これは両者が同時期に存在したことを示している。石を築いた造構という性格上第2面が統一全期間S Za01は存在し、S Aa03の項で述べたようにS Ka08→S Aa03→S Da01という変遷が第2面の中で

たどれる。S Ka08の埋土のうち17層には基盤層のブロックが含まれ、埋め戻したと思われる。その原因はS Aa03の打設にある可能性がある。

S Ka08は掘り込みの肩から急激に落ち込み整った平面形を持つことから泥溜まりではなく明らかに造構である。ここではS Za01の項で述べたように同じ面に属するS Pa103・al04の中間とS Ka08の中間をむすんだ線は地割り方位に一致することもあり、両ピットと密接な関係にあったように思える。

7~10は出土遺物である。7は胎土が精良で、外底もなでつけるなど丁寧な仕上がりである。8は在地産の胎土を持つ。9は傾きから擂鉢としたが、土鍋の可能性も残る。いずれにしても径が小さい。残存部には御し目は残っていない。在地産の胎土である。10は吊り手部が残っている。金雲母を含まず他の土師質土器とは若干胎土が異なる。外面と内面上部に煤が付着している。図示した他に平瓦、土師器などの土器片が少量化出土している。詳述してきたように、第2面に属する。

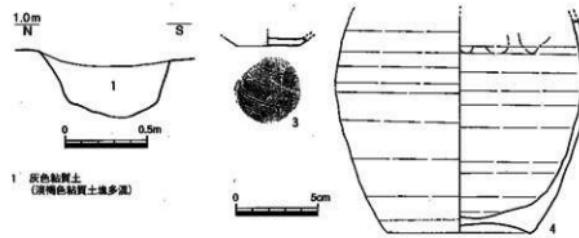
S Da01 (第8~10・18・20図、図版1~4・6・9~14)

12F区・11H区両地点で検出した溝である。N04°Eの方位を向く。幅50~60cmの素掘りの溝であるが、平成12年度に調査した12F区北隣の12J区でも検出しており、基幹となる溝として認識できる。

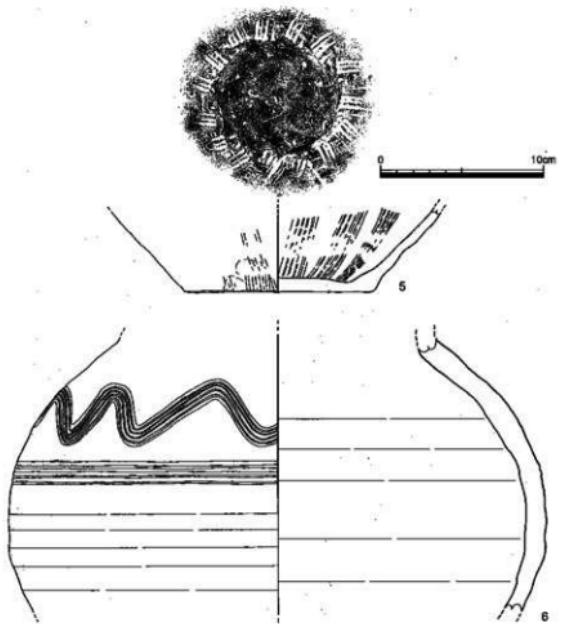
溝は第2面から掘り込まれる。これはS Aa02やS Ka08の項で述べたように整地直後ではない。埋土は大きく2つの層に分かれる。下層は基盤層のブロックの混入が著しい。両層の間に自然堆積の形跡はないため、時期差でなく埋め戻しの段階を示すものと考える。

S Da01の底にはS Za01の自然崩壊による小礫の転落が見られた。これはS Za01が残っていた範囲で特に著しく、それ以外の地点では逆にS Za01に関わる石が判断できないほどまばらである。とりあえず小礫の流れ込みにより、両者が共存していたことは明らかである。またこれはS Da01が第2面に属することを示している。

11~35は出土遺物である。11は中国青磁である。片切り彫りによって蓮弁を表現している。釉は蓮弁の途中までしかかっていない。内面下端は見込み部



第16図 S Ka04断面図 (S=1/30)、出土遺物実測図 (S=1/3)



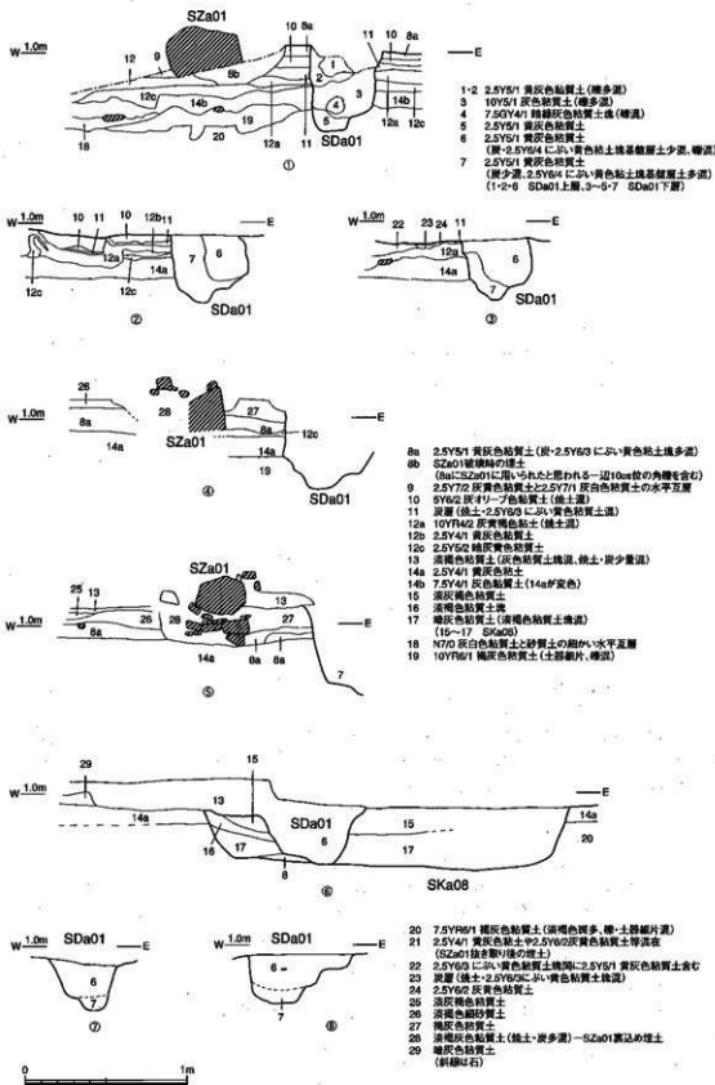
第17図 SK a07出土遺物実測図 (S=1/3)

が残り釉剥ぎがなされている。15世紀のもので混入であろう。12~17は軟質でやや黄褐色を帯びた胎土を持つ中国産の染め付けで、漳州産とされるものである。12~14・17は碗、15・16は皿の可能性もある。13は見込みにも文様が少し残っている。16世紀後半のものである。14は高台内面は露胎である。16は外面文様は直線で構成され雷文帯に似る。17は内面は蛇の目釉剥ぎがなされ、高台内面は露胎の上に釉が汚くたれています。17世紀後半~18世紀初頭の製品である。18は中国青磁である。19は肥前系磁器碗である。文様から17世紀末から18世紀前半の製品と考える。20は磁器皿である。いわゆる基筒底で端部から外側に蛇の目釉剥ぎして段がついている。高台内面にも二重線が描かれる。21は瀬戸美濃陶器の天目碗で外面部下半は露胎である。体部を削り高台を作ることをしていない。22も褐釉の天目碗で釉色は淡い。23は陶器皿で内外面とも釉に貫入がある。24は陶器の底で、白い釉を掛けその上に藍色で文様を描いています。25は陶器碗で全面釉をかけている。内面には金泥が放射状に塗られているように見え、楽焼の可能性がある。26は陶器の向

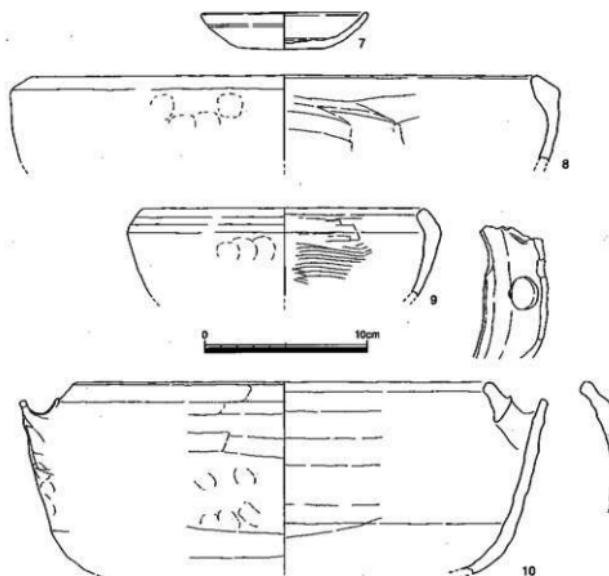
付で底部は糸切りしている。内面のみ施釉している。胎土や釉の色から肥前系と考える。27は陶器で板状の製品である。同じような部品とつなげた後に上面に厚く施釉しそれが接合部の隙間にたれている。側面には剥離した痕跡がある。上面には不規則な幅・深さで溝が入れられる。底には小砂粒が厚く付着している。焼成時か使用時か付着した時期はわからない。28は陶器の灯明具で化粧掛けをしている。胎土から備前焼かと思われる。29は土師器小皿で口縁部が極めて厚く、体部は途中で外に屈曲する。30は土師器小皿で回転糸切り後へラナデしている。31は土師器灯明皿で口縁内面の一部に煤が付着している。32は陶器で蓋がつく碗と思われる。内外面とも透明釉をかける。33は土師質火鉢の脚部である。34は土師質土器で土場か。35は鉄製の小刀で両部には鋒が厚く付着している。図示した他に平瓦、土師器などの土器片が少量出土している。以上いずれも小破片であり、別の地点にあったゴミを持ってきて捨てたようにもとれる。これらの遺物が示すのはSD a01の埋立時期である。時期判断の難しいものが多いが、わかるもので行くと漳州産磁器や肥前系磁器が18世紀前半を下限とする。21も口縁の屈曲が弱く高台が削り出されていないなど新しい様相を持っている。一方明らかに19世紀代に下るものはなく、18世紀前半を埋立の目安としておく。

S Z a01 (第8・10・18・21図、図版1・3・4・9~15)

12F・11H両地点で検出した。東側が一直線になるよう表面を東に向けて石を組んでいる。据から1段~2段が現存していた。現状から最低でも標高14mの高さまで積まれている。これは第1面を14m以上とした考え方と矛盾しない。50cm前後の安山岩を主として用い、隙間に小礫を詰める。石組みの前面にはこれらの小礫が多く崩落している。21図では平面図のみ崩落石を表現し、立面図ではわかりにくくなるため省



第18図 SKa08・SDa01・SZa01断面図 (S=1/30)



第19図 SK a08出土遺物実測図 (S=1/3)

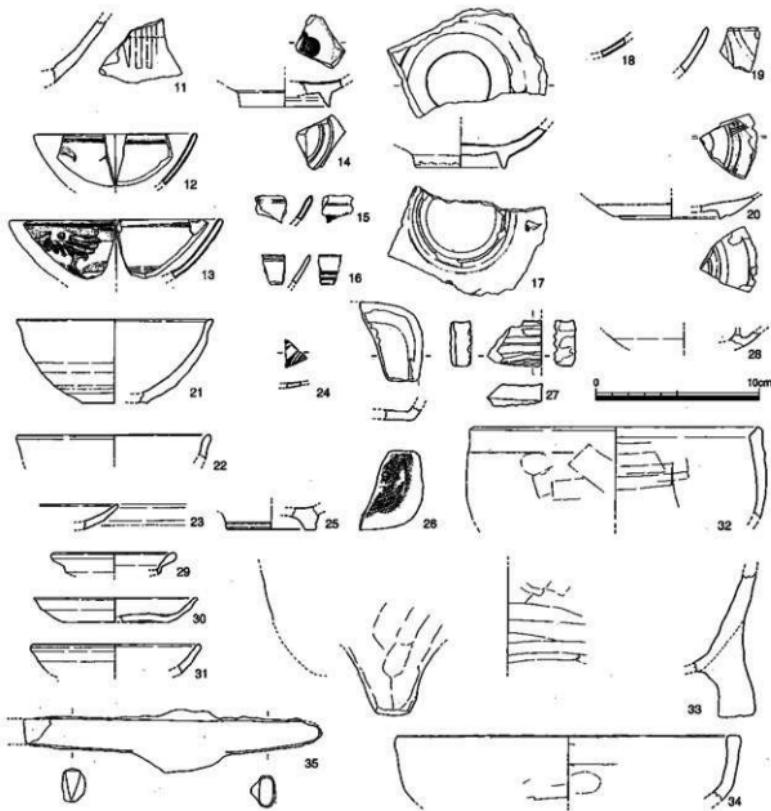
いている。

断面図の検討から整地層と S Z a01 の関係を考えてみたい。上の 3 つは 12F 区部分である。S D a01 の上は標高 1.0m まで攪乱が及んでおり、溝の掘り込み面は厳密には不明である。断面①の周辺では S Z a01 に用いられたと同じ石を検出し、ここにも S Z a01 の続きもしくはそれと同じ石積み遺構が存在したことが判明した。8b・9・21 層は石か動き抜かれた後に落ち込んだ土である。石の真下には第 4 図 10 層である 11 層の炭層が接しており、石積み遺構が第 3 面での火災直後に築かれたことを確認した。8a・10 層は第 4 図 9 層、12 層は同 11 層、14・18・19 層は同 12 層にある。20 層は基盤層である。断面④・⑤は 11H 区部分である。14a 層直上に S Z a01 を積む。14 層上には東西とも 8a 層で整地する。更に S Z a01 の妻側である東には第 4 図 8 層相当の 27 層があり、13 層は第 1 面への整地土である。西の裏側では 26 層があり、これは東側とは対照的に細かい砂を多く含む土である。その上は 13 層土で第 1 面へと整地される。S Z a01 の真裏は裏込めの石を詰めた 28 層があり、第 2 面の高さまで存在する。以上より第 3 面火災後までは S Z a01 を組む。その後東は

1.1m までの整地を行う。整地土は S Z a01 下部を密着して覆う。これは詰め石見えなくして外観を整え、S Z a01 の上からの圧力により幅が外へ膨らもうとする崩壊を防ぐ機能を併せ持つ。上に重たいものを載せるためにこのような構造をしているといえる。一方西は、当初 S Z a01 裏側まで整地し掘り返して裏込め石で基礎をしっかりと固め 28 層で埋めたとみると、裏込め石を詰める部分を開けた状態で整地したと見たい。ただしこのような構築過程

が工法的でありうるのかは検討課題である。

さて図版 11 上下から見る限り S Z a01 はまだ南に続くよう見えるのに、すぐ南の断面⑥ではその存在を窺わせるものは全くない。13 層には下の 14a 層の土が混入しており、石を抜き取る際に周囲の整地土も一緒に掘り起こしたためそれを巻き込んで埋め戻した土と思われる。13 層が削られた 14a 層の底面につけた痕跡は、S Z a01 の幅で南端の石から 13m の範囲まで続いている。つまりここまででは S Z a01 が続いている可能性が高いことになる。また 13 層は S P a103 堀り形を一部覆っており、このピットが第 2 面以下に属することも明らかである。ただし、この痕跡がないことにより S Z a01 がここで終わっていたかというと、簡単に判断できない。S P a103・a104 を対と考えれば、その方位からこれが 2 面に属することになり、その中间地点で S Z a01 が終わるとは考えにくいからである。この場合 S P a104 付近では SK a08 が S Z a01 の縦に 20cm もえぐり込むことになり、S Z a01 の崩壊を防ぐため SK a08 を埋め戻したとも考えることができる。第 5 図④ 11H 区南壁では第 2 面整地土が S Z a01 抜き取りによる影響を被らずにであることから、11H 区南端



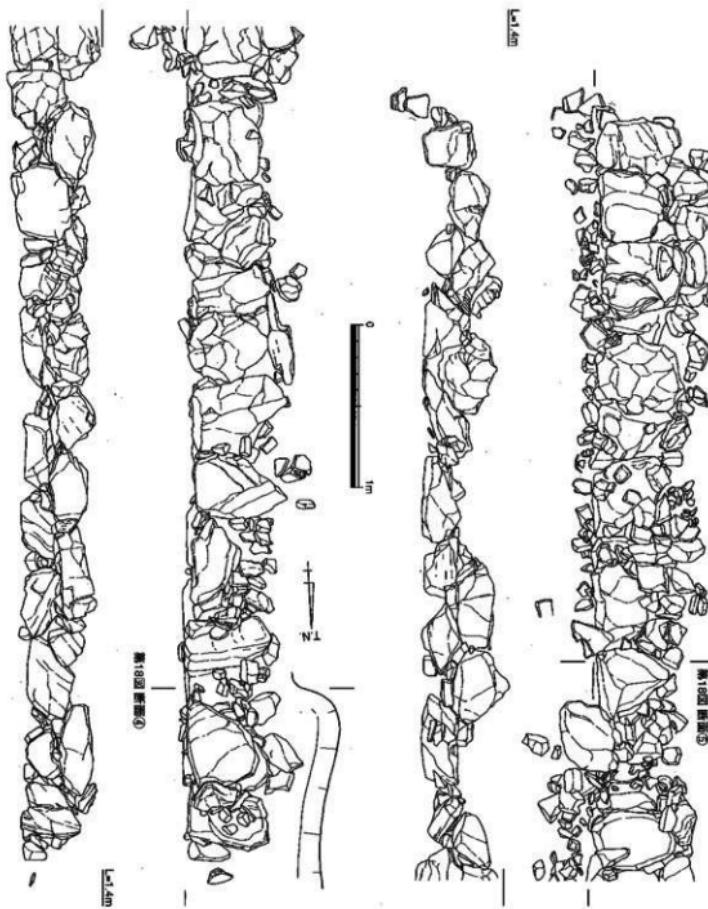
第20図 S D a01出土遺物実測図 (S=1/3)

までの間にS Z a01は終わる。

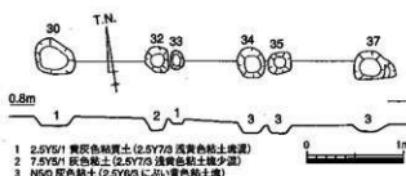
S Z a01は積み石の奥行きは70~80cm前後ある。これは断面④・⑤にあてはめると28層より西に位置する。つまり第21図右上の平面図部分に見られるように積み石と十分間隔が空いていない限り整地後に掘り返したと見なすことは難しい。これは裏込めと整地が平行して行われたとする見解と一致する。

さて改めてS Z a01より西の第2面の標高を検討したい。S Z a01を低い石垣と見ればこれを壇に地面の高さを変えて整地することは十分考えられるからである。この章ではここまで東西とも一定であるという前

提で記述を進めてきた。S Z a01より西でもこの標高で遺構を検出しているからである。しかし第1面へと整地する際に土を削って入れ替えればこの前提は崩れる。ではこのような状況が行われたのかというと、否定しておく。掘り起しによる土層上面の乱れではなく、何より入れ替える必然性がないからである。するとS Z a01の奥行き分のみ地面より高い状況が生まれる。ここには何らかの構造物が想定される必要があり、まずは土壙が思い浮かぶ。もちろん奥行き分の厚い壁は考えにくい。壁よりはみ出た西の部分は隙間に土を詰め段を形成するようなことが考えられる。ただし石積



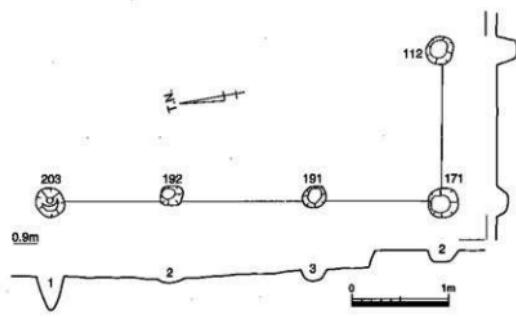
第21図 S Z a01平・立面図 (S=1/30)



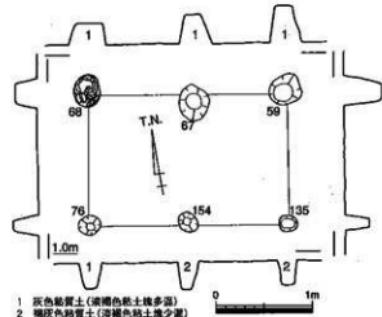
第22図 S B a02平・断面図 (S=1/50)

みの間には土塀の輪木となるべき柱を立てていた痕跡はなかった。単なる石塁を想定してもよいが、防御の石塁を築く必然性は全くない。S P a183他、石と石の間に位置するようなピットがあり、上部構造物の支えとして関連づけることも可能であるかもしれない。

以上高松城跡（西の丸町地区）では他にこのような石積み遺構は見つかっていないため、その分 S Z a01が重要な遺構であることは間違いないが、



第23図 S B a03平・断面図 (S=1/50)



第24図 S B a04平・断面図 (S=1/50)

なぜこの地点に作られたのかを含め、今報告では S Z a01 の機能について明らかにすることはできなかった。

第4節 第3面の遺構

S B a02 (第8・9・22図、図版1・2)

12F区南東部で検出した。3間の柱1列のみであり、南側にこれを一辺として展開していくと思われる。N 99° E の方位を向く。柱間は12m。中央2穴にはそれぞれ東に小ピットが付随し、両端2穴も調査時にはわからなかつたがピットの平面形が東に小さく膨れている。これら4つの小ピットも等間隔に並んでおり、小ピットと大ピットの列は建て替えの関係にあると考える。どちらが建て替え後のものかはわからない。ビ

ットからの遺物の出土はなかった。掘り込み面は不明であるが、第2面に属する遺構群との方位のずれから第3面に属する。

S B a03 (第8・10・23図、図版4・14)

11H区北東隅で1×3間分を検出した。N 09° E の方位を向く。柱間は南北13m、東西1.6m。北から3つ分のピットは S D a01 の埋土を取り除いた後に検出した。また、南西角のピットは第18図27層除去後に検出した。よって同12層より新しく、S D a01 より古い。ピットからは中世以前の土器細片が少量出土したのみである。掘り込み面から、第3面に属する。

S B a04 (第8・10・14・24図、図版5)

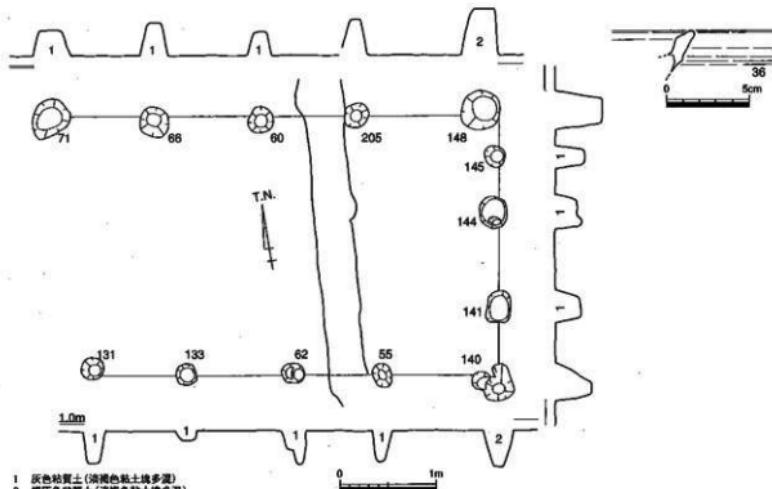
11H区南部で検出した1×2間の小型の掘立柱建物跡である。N 09° E の方位を向く。柱間は南北16m、東西1.0m。北西角のピット内では根石と立てた柱を固むように石を詰めている状態が認められたり、検出時より若干大きくなっているとはいえ北側と南側のピットの大きさに差があるなど、小型の簡素な掘立柱建物跡を構成するには若干不安材料が残る。ピットからは中世以前の土器細片が少量出土したのみである。掘り込み面は第3面かその上になるが、第2面に属する遺構群との方位のずれから、第3面に属する。

S B a05 (第8・10・25図、図版5)

11H区南部で検出した4×4間の掘立柱建物跡である。N 09° E の方位を向く。柱間は南北0.5~1.0m、東西0.95~1.35mで必ずしも等間隔には並ばない。また北列と南列でも対称的な位置にピットが描かない。そのため建物の西端がどこになるのか、攪乱を受けたより西に位置するのかもわからない。これも簡素な小屋だったのであろうか。北列東から2つ目のピットは S D a01 より古い。ピットからは図化した36以外は中世以前の土器細片が少量出土したのみである。36は器種は不明で口縁部或いは底部である。遺構の掘り込み面は第3面かその上になるが、第2面に属する遺構群との方位のずれから、第3面に属する。

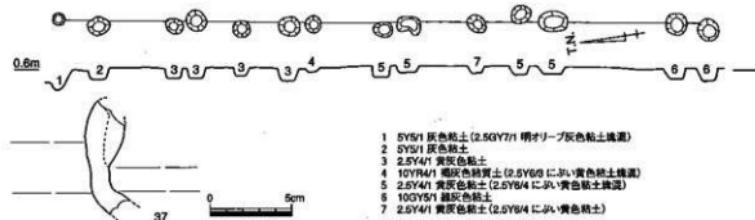
S A a02 (第8・9・26図、図版1・2)

12F区西部で検出した。N 09° E の方位を向く。S A a01 同様一直線上から多少ずれ、更にピットの間隔



1 灰色粘質土(淡褐色粘土堆多混)
2 暗灰色粘質土(淡褐色粘土堆多混)

第25図 S B a05平・断面図 (S=1/50)、出土遺物実測図 (S=1/3)



第26図 S A a02平・断面図 (S=1/50)、出土遺物実測図 (S=1/3)

も等しくない。ピットは隣り合せることもあり、打ち替えを考慮して間隔0.75mと1.0mで検討したが、いずれも結果は芳しくなかった。こちらは平面形がやや広いため、ピットを掘った後に杭を立て周囲を埋め立てたと考えている。ピットからは37以外は中世以前の土器細片が少量出土したのみである。37は備前焼の大甕で口縁端部を欠いている。遺構の掘り込み面は第3面かその上になるが、第2面に属する遺構群との方位のずれから第3面に属する。

S P a068 (第8・10・14図、図版16)

11H区南部で検出した。S B a04の北西角を構成する柱穴として取り上げている。底に穴とほぼ同じ大きさの石を敷き、北側にある直径15cmの空間部分に直

径15cmの柱を建て、その回りに礫を詰めていった状況を示している。柱穴内から遺物は出土していない。S B a04の柱穴として第3面に属すると考える。

S P a183 (第8・9・27図、図版15)

11H区北部で検出した。楕円形の掘り形を持ち、中には楕円形の方向である南東側に斜めに立てられた柱が残っていた。柱の北西には詰め石のなか小砾が1個存在した。柱穴内から土師器や平瓦の細片が少量出土している。標高0.9mで検出したことになっているため第3面に属すると判断したが、平面位置が東に接するS Z a01を構成する石と石の間にうまく取まっており、S Z a01と関連する可能性も残る。とはいっても斜めに立てられた柱はこれ1本のみの検出で、機能は明らか

でない。

ピット出土遺物（第9・28図）

ピット出土遺物の中で比較的残り具合が良く、本来の時期を示すと思われるものを図化した。38は12F区にあるS P a003から出土した。39は12F区にあるS P a052から出土した。掘り込み面は明らかでない。38は陶器の小さな壺の肩部で、色から備前焼の可能性がある。39は肥前系の磁器碗の体部である。

S K a01（第8・9・29図、図版1）

12F区で検出した平面形が不整橢円形の土坑である。40・41は出土遺物である。40は土師質の土釜で、在地産と考えた胎土を持つ。41は丸瓦で、内面にコビキ痕が明瞭に残る。図示した他に平瓦片と須恵器片が出土している。標高0.8mで検出しており、掘り込み面は第3面かその上である。

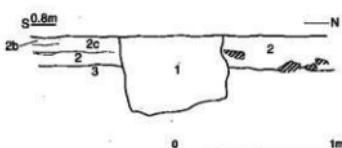
S K a02（第8・9・30図、図版1・2）

12F区南西隅で検出した。直径2mの長楕円形の土坑で、南半分が調査区外に広がる。土層断面図を作成するのを忘れたが、中央が窪む層状の堆積で中には砂質土も含まれることから、自然埋没した遺構であることがわかる。42は出土遺物で中国磁器の皿である。図示した他に平瓦、土師器、備前焼などの土器片が出土



第27図 S P a183平・断面図 (S=1/30)

第28図 ピット出土遺物実測図 (S=1/3)



- 1 10YR4/1 堆灰色粘質土 (厚2.5Y6/3 にかけ黄褐色土塊多箇)
- 2 10YR4/1 堆灰色粘土
- 2b 2層と同じ
- 2c 2.5Y5/3 黄褐色粘土 (2層と2b層の間に木の根の腐植物が介在し、この高さでS X a02に点在)
- 3 10YR7/3 にかけ黄褐色粘質土 (基盤層)

している。S K a02は標高0.7mで検出しており、掘り込み面は第3面かその上である。

S K a05（第8・10図、図版5）

11H区南部で検出した。0.5×現存長0.8mの楕円形土坑で、西側は攪乱により破壊される。深さは20cm弱である。埋土は灰色粘質土の单層で基盤層のプロックを含み、埋め戻されていることがわかる。中からは土師器と須恵器の細片が少量出土している。攪乱を取り除いた標高0.9mで検出しており、これ以上の面に属する。

S K a06（第8・10・31図、図版5）

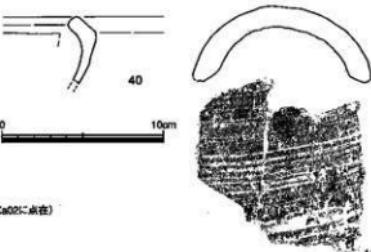
11H区南西部で検出した。径0.6mの円形の土坑である。深さは30cmである。埋土はS K a05と同じで、同様に埋め戻されていると判断できる。攪乱土を除去した標高0.5mで検出しており、どの面に属するか不明であるが、状況からS K a05と同じ時期ではないかと考える。43は出土遺物で土師器壊である。図示した他に土師器や須恵器片が少量出土している。

S D a02（第8・9・32図、図版1・2）

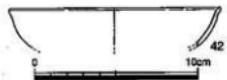
12F区で検出した。N 08° E の方位を向く。約5mの長さで北は落ち込みの明瞭な上がりが認められるが、南は自然消滅する。第3面の地割り方位に近いが、形状より12F区のS X a02等と同様自然の落ち込みで構でないと考える。2層の窪んだ部分に1層土で埋め立てている。2層内は前節の⑧・⑨項で述べたように木の根が多く走る。44は出土遺物で瀬戸美濃陶器の皿である。全面施釉している。17世紀前半以前のものであろう。図示した他に土師器や須恵器片が少量出土している。第3面より下の面に属する。

S D a03（第8・10図）

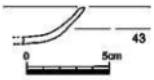
11H区南部で検出した。S D a01に合流する形にな



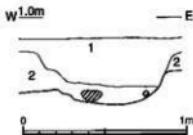
第29図 S K a01断面図 (S=1/30)、出土遺物実測図 (S=1/3)



第30図 S K a02出土物実測図
(S=1/3)



第31図 S K a06出土物実測図
(S=1/3)



第32図 S D a02断面図 (S=1/30)、出土遺物実測図 (S=1/3)

っているが、埋土が淡灰色粘質土であるため、より古いと考える。深さは15cm程度で浅い。溝からの遺物の出土はなかった。

S D a04 (第8・10図、図版17)

調査終了後雨水により浸食崩壊した東壁南部の奥から現れた。調査区内に含まれるが、境界にブロック塀が建ちその真下に当たるために、表面観察に止めた。このため図面ではなく、石列西面の方向のみを第10図に書き込んでいる。

溝としたのは長さ2m分の石列で、N 09° Eの方向にはほぼ同じ大きさの石が直線に7個並んでいる。上には積まれていないが、平坦に揃えている。遺跡内の他の調査区の成果から、両側を石で組む排水溝と考える。但し、検出した石列は西に面向しているよう、溝であるなら更に西に對になる石列が存在するはずであり、これは検出していない。本当は東にもっときれいな面を揃えているか嵩上げした建物用の土地の回りを固めた石列の可能性も残る。石の底は標高約0.8mで第5図12層内にある。12層は自然堆積土であるので、石列は上面より掘り込まれた掘り形内に組まれたとみる。石の上面は1.06~1.1mで第2面の標高に近い。しかし、ここでは方位を優先し、第3面からの掘り込みと考えたい。つまり溝であるなら、石の上半分が地面より上に出ていたことになる。

第5節 整地層出土の遺物 (第33・34図、図版18~21)

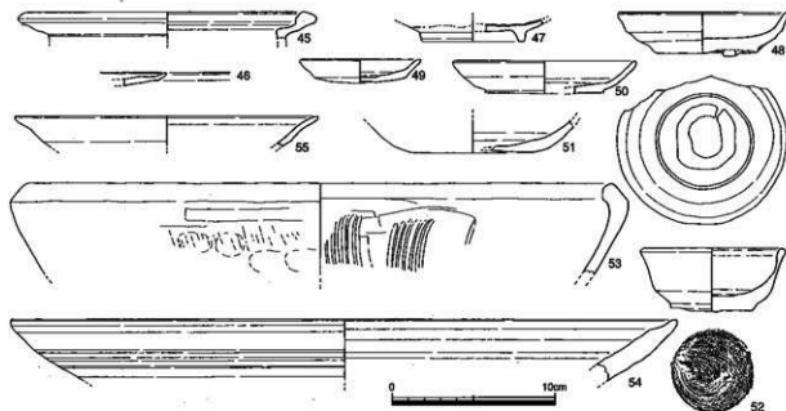
45~89は整地層出土の遺物である。12F区出土分は第4図に対応する層位名で取り上げた。一方11H区出土分は遺構面の標高が水平であるという仮定の下に

10cmを最小単位とする標高で取り上げ、これを各遺構面間の整地層に属するものとした。従って遺構面に凹凸があれば上下の整地層に本来属していたものを含めてしまっている可能性もある。このような理由で12F区と11H区出土遺物は分けられていている。なおレイアウト後、層位の所属整地層の判定に混乱があったことが判明し、以下の記述に対して図面にずれが生じてしまっている。

45~54は第1~第2面間の整地層出土遺物である。45は4・5層出土で、陶器土鍋の口縁である。19世紀代のものであろう。46は6・7層出土の陶器で、

傾き、どちらかが内外面かも不明である。47~54は11H区の標高1.2~1.3mの整地層から出土した。47は肥前系と思われる磁器皿で見込み部は蛇の目剥りぎを行っている。高台、高台内面は露胎である。48は瀬戸美濃陶器の皿で見込みには濃緑色の釉が厚く溜まっている。割れ口は焼けている。外底には輪トチの跡がつく。49は土師器小皿である。全体に摩滅気味で、外底はヘラでなでて仕上げている。50は灯明皿で、内面に煤が付着している。外底は静止糸切りである。51は土師器皿で、外底はヘラでなでて仕上げている。52は深い土師器皿で、外底は糸切りである。胎土には在地産の土師質土等に共通するとした金雲母を含む。53は土師質擂鉢で、6条1単位の卸し目をつける。胎土には金雲母を含む。54は陶器で大鉢とした。備前焼に色は似るが、胎土に小さな隙間が多く表面の1mmのみ特に焼き結まっている。

55~57・65~75・77~79・82~89は第2~第3面間の整地層出土遺物である。55は8層出土の陶器皿で、胎土や釉の剥げ方が48と似る。56・57・65は火災によるものとする10層出土である。56は軒平瓦で、三つ巴の回りに10個の珠文を配する。同範の瓦がB地区の第1整地面上と下面の間の整地層から出土している。この整地層は18世紀前半と捉えられている。57は備前焼の擂鉢で、口縁直下の部分である。卸し目の単位はわからない。17世紀第4四半期~18世紀前葉頃の製品と考える。65は鍍金の鉄製品で飾り金具であろうか。半円の弧を描く径6mmの断面を持つ棒を左端で折り曲げている。本来直線をなしていたものが土圧のため歪んでいる。66~71・74・82・84・86~88は11H区の標高0.9~1.1mの整地層から出土した。66は中国磁器碗である。67は中国磁器皿で、軟質の胎土を持つ漳州産とされるものである。68の碗も漳州産と思われ肌色の軟質の胎土である。69は中国磁器



第33図 整地層出土遺物実測図（1）(S=1/3)

皿である。70は磁器の口縁で皿と思われる。71は肥前系磁器皿で17世紀前半頃のものである。74は肥前陶器皿で、内面に2カ所胎土目が残る。17世紀前半のものであろう。82は土師質擂鉢で卸し目が少し残る。在地産とした胎土を持つ。84は軒桟瓦である。「ダンシ・カネヤ」という刻印を押す。高松市内南方の檜紙町で生産されたものであろう。近代に属する混入品である。86～88は土師質土錘である。86・87は穿孔型、88是有溝型である。75・83・85・89は11H区の標高0.9～1.0mの整地層から出土した。75は肥前系陶器皿で高台に切り込みがある。また内外面に砂目積みの痕跡が残る。17世紀前半のものであろう。83は土師質火鉢脣部に押された刻印の文様である。85は陶器でタイル状をしている。幅6cmで長さ不明、6mm間隔で平行に溝を切り込んでいる。その上に釉を厚くかけて、溝が一部つぶれている。裏側中央には接合剝離面が残る。89は銅製品で薄い板を巻いて中空にしている。右端は折れていかない。72・73・77～79は精査等で出土した。72は中国青磁で皿と思われる。焼成が悪いため緑釉にまだらの白い筋が多く走っている。73は肥前系陶器の刷毛目皿である。17世紀後半～18世紀のものである。77は陶器の碗である。内外面とも体部のみ緑釉がかかる。78は陶器の碗である。胎土が一部赤変し、それが薄い白釉を通して文様のように見えている。79は筒状の陶器である。徳利の可能性がある。褐釉が内外面ともかかる。

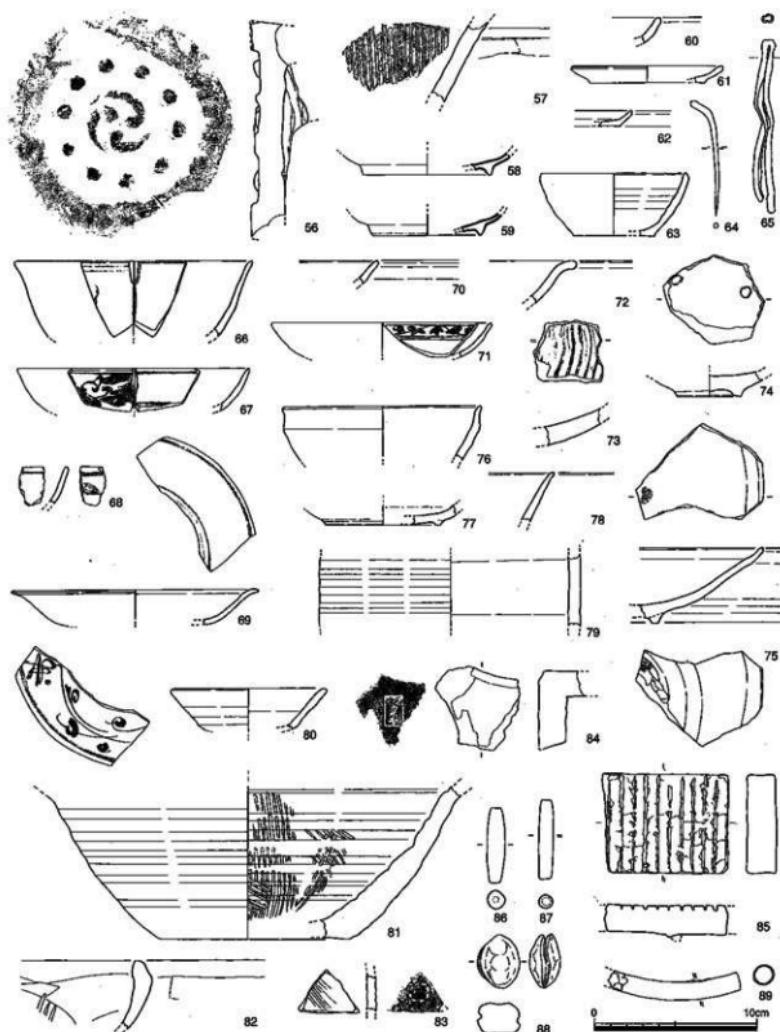
58～64は第3面下位の整地層である12F区の11層から出土した遺物である。58・59は16世紀の中国白磁皿

である。59は高台端部のみ釉がかかっていない。60は瀬戸美濃陶器皿である。61・62は土師器小皿である。61は口縁はナデにより沈線状のくぼみが巡る。63は深い土師器皿で、外底はヘラなどで仕上げている。64は鍍金の鉄製品で原型を保っている。10・11層名で取り上げており、65と同じく火災にあった可能性もある。

第6節 包含層出土の遺物（第35図、図版20・21）

76・80・81・90～109は基盤層上面に自然堆積した灰色粘質土の包含層内から出土した。12F区・11H区とも共通の堆積状況を示すため、合わせて記述する。

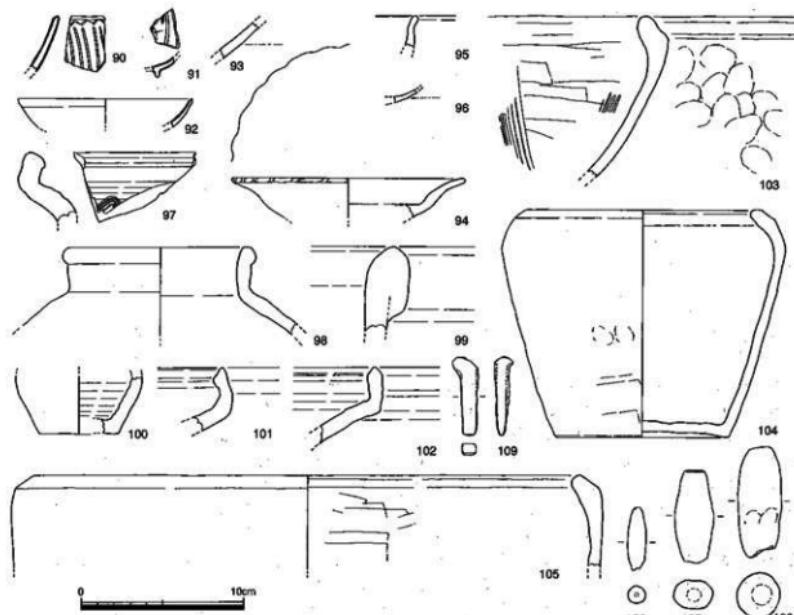
76は陶器天目碗である。口縁下の屈曲は稜を持つほど明瞭である。80は備前焼皿である。81は備前焼擂鉢である。卸し目は8本1单位でつけられる。16世紀後半～17世紀前葉のものである。90は中国青磁碗で蓮弁はヘラ先により細線で描かれる。綾細線と劍頭は対応せず蓮弁としての意識が忘れられつつある。15世紀後半～16世紀前半のものである。91は中国産の染め付け碗である。16世紀初頭前後のものである。92は16世紀の中国白磁皿であろう。93・94は肥前系陶器皿である。94は上面から見ると口縁が波状を描く。17世紀前半以前のものであろう。95は天目碗である。褐釉が全面にかかる。96は陶器で内面全体と外面上半に白釉がかかる。97～102は備前焼である。97・98は壺で97は肩に波状文が描かれる。99は大壺の口縁である。100は小さな壺



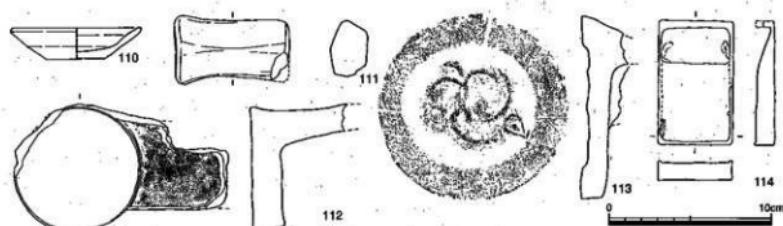
第34図 整地層出土遺物実測図(2)(S=1/3)

である。101は大平鉢である。102は擂鉢である。口縁は直下に段を持たず直立する。16世紀前半頃のものであろう。103は土師質擂鉢で卸し目は5本以上が1単位である。胎土には金雲母を含む。104は土師質の壺である。

る。胎土には金雲母を含まない。105は径不明の大型の土釜である。106～108は穿孔型の土釜で、107・108は中型の大きさである。109は釣と思われる。頂部は横に曲がる。



第35図 包含層出土遺物実測図 (S=1/3)



第36図 攪乱層出土遺物実測図 (S=1/3)

第7節 攪乱出土の遺物（第36図、図版21）

110～114は攪乱など層位に関係ない状態で出土した。110は土師器小皿で完形で出土した。外底はヘラでなでて仕上げているが砂粒を多く含むなど全体に稚な作りの印象を与える。111は器種不明の土師質土製品で中央が少しづぶまる。断面は5面に面取りしてなでられている。両端には原体から剥離した痕跡もない。

紐を結ぶ土錘であろうか。胎土には黒色砂粒を多く含む。112は軒桟瓦である。「高松水屋」の刻印が押される。大正頃に市内中心部の新瓦町に存在した瓦屋である。113は平成12年度高松城跡（西の丸町）概報で巴文の変形した草状文の意匠とされるもので、17世紀前半のものである。114は石製の硯で海部両端に朱と思われる赤い顔料が付着している。

第3章 まとめ

以上3面の遺構面の存在を想定した。

あらためて遺構面と遺構との関係をまとめると、最下面である第3面（標高0.9m前後）は、沖積作用が終了し付近が陸地化した後に包含層の自然堆積が進みその凹凸に一部土を入れて均した結果、形成された。この遺構面ではN09°Eの方針を基軸として地割りが設定され、掘立柱建物跡や横列・石組み溝が作られた。それらは擾乱部分を除けば遺跡のはば全域に広がる。

第3面の遺構群は火災により焼失し、燃えかすは薄い炭の層となる。炭層が乱れていないことから、第3面はこの時点で役割を終えた。焼け跡では、散乱した壁土などの焼土を巻き込んで再び整地が行われた。この結果、地面は約20cm高くなった。これが第2面である。第2面はN04°Eへと基軸がずれる。5度のずれは現実にはほとんど違和感を感じさせないものであろうが、町並みの中のある部分だけをすらすことは不可能であり、この火災がかなりの広範囲に広がっていたことを物語る。火災は新たなる地割りの構想の契機となり、単に旧に復することにはならなかった。焼け跡の上には整地を行っていく中で長い石積み（S Z a01）が築かれた。石積みの上にどのような構造物が設けられたのか明らかにすることはできなかつたが、奥行きの大きさからそれなりの壁を構えることも十分可能である。この石積みにより今調査区内は東西に二分される。石積みの東は外、西は内となった。調査結果では、東と西のこの時期の遺構密度は極端に違い、また遺構の種類も異なり、外と内に対応する。石積みから東の中堀までは15m前後の距離がある。第3面では東端の石積み溝（S Da04）が西に向いており、その東にも遺構群が続いていることが予想され、結果として中堀の真横があるいはその近くまで屋敷群が広がっていたことになる。第2面では石積みの東に35mの空間が形成され、そこから中堀まで更に10m前後あるが、絵図によるとこの一体は上級住民が住むよう区画であり、果たしてこれを奥行きとする狭い屋敷地を設けたのか疑問は残る。あるいは中堀までおおきな空き地となったことも考えられないこともない。この石積みは第2面が使われ続けた間存続し、石積みの南端に門があった可能性も指摘した。その前（東）には大きな落ち込みが存在し、これはやがて埋め立てられ、その後に石積みと平行し柵が設けられ、それは更に南北100m以上となる溝（S Da01）にとってかわられた。溝は城下の調査地点でよくみつかる石組みでなく素掘

りのものであるが、位置や長さからみて計画的に作られたものであることは間違いない。

最後の第1面としたものは、石積みの上部構造物を壊し石積みや溝を埋め立てて更に土地の嵩上げを行って形成された。近代以降の整地土や擾乱によりその標高は1.4m以上であることまでしかわらない。埋め立てた溝の真上には簡易な柵が組まれ、第2面からの地割りが基本的には継続している。しかしこれ以外の遺構を検出してなく、第1面の具体的な様相は明らかでない。

次に各遺構面の時期を考えてみる。整地層出土の遺物でみると、まず第1-2面間では19世紀代と思われる遺物が出土している。次の第2-3面間も時期の判明するものは少ないが、火災による炭層から出土した備前焼鉢は17世紀後半～18世紀前葉頃の製品とみられ、軒丸瓦は同範の瓦がB地区の第1整地面上面と下面の間の18世紀前半ととらえられている整地層から出土している。このあたりから、火災の年代の上限を18世紀前半と考えたい。他の遺物もこれと矛盾しない。第3面下位は12F区では整地層である第4回11層と自然堆積層とした同12層に分かれ、11H区は12層だけで構成される。11層では時期を限定できるような遺物は出土していない。最下層の12層は時期の上限を示す遺物として備前焼鉢と肥前系陶器がある。高松城が築かれたのは1588年とされ、A地区の一带はそれより大きくなつて下らない時期に上級住民が住むようになったはずである。第3面をこの時の遺構面とすると12層には基本的には1588年以後のものは含まれない。肥前陶器は1580年頃に生産が始まるとされ、12層に含まれる可能性は極めて低い。しかし12層下の基盤層上面を1588年に置いたとしても、この面は12F区で見られるように凹凸があり、標高差も12F区北端と11H区南端では20cmも存在する。しかも12層は整地層とは考えにくい土質である。築城期の遺構面は火災に遭うまで存続し続いている。18世紀前半までに範囲を広げ、この遺構面に落ちた遺物が何らかのはずみで土中にめり込んだかこの遺構面上にあったため12層出土遺物として取り上げたかの可能性を考えておきたい。

以上極めて大雑把ではあるが、第1面は19世紀以前、第2面は18世紀前半以前、第3面は1588年が遺構面の上限である。

最後にこれらの遺構面が平成7・8年度に把握したどの遺構面に対応するかを考えるかを述べておく。

平成7・8年度遺構面は、その調査対象地を高松城

跡（西の丸町）B地区として現在整理作業を行っている。その中で整理担当者は遺構面を改めて検討している。詳しくは当該年度の概報（平成12年度サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告「浜ノ町遺跡・高松城跡（西の丸町）・西打遣跡」香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター、2001.3）を参照されたいが、当初の第1遺構検出面・上を第1面とし、第1遺構検出面・下を第2面、第1整地面・上を第3面、第1整地面・下を第4面、第2整地面を第5面、第3整地面を第6面としている。最初に述べたように、本報告の第1面とこの第1面は異なる。

今報告で最も特徴的な第3面から第2面への火事による整地と地割りの変化を鏡にすると、B地区の第5面から第4面への変化が現象的にはこれに近いと思われる。これは1718年の城下の大火灾により屋敷割りを整理したというものである。A地区では第2面の上限を18世紀前半としており、矛盾ではない。これで行くと、A地区第3面=第2整地面=B地区第5面、A地区第2面=第1整地面・下=B地区第4面になる。ただしA地区では3面にしか遺構面を分けることができなかつたため、A地区第2面=第1整地面・上になる可能性もある。最初に考えた遺構の変遷はかなり大胆なものであるといわざるをえないのであるが、隣り合っていても場所によって整地回数に差があるというのでない限り（つまり同一時期でも標高差が存在することを認めることになり、遺構面の整合がより難しくなる）、第4図8層と9層の境を第1整地面・下とせざるをえなくなる。基本層序の項で土質が似るため両者を1単位としたのであるが、仮に第1整地面・下としても、第2面に属するとした遺構がそれぞれ第1整地面・上と下のどちらに属するのか明らかにできない。

調査区	造構名	掘り込み面	報告書 造構名	
12F区	F区 SA01	第1面	SAa01	
12F区	F区 SP01	第3面以上	SPa001	
12F区	F区 SP02	第3面以上	SPa002	
12F区	F区 SP03	第3面以上	SPa003	
12F区	F区 SP04	第3面以上	SPa004	
12F区	F区 SP05	第3面	SPa005	SAa02
12F区	F区 SP06	第3面	SPa006	SAa02
12F区	F区 SP07	第3面	SPa007	SAa02
12F区	F区 SP08	第3面	SPa008	SAa02
12F区	F区 SP09	第3面	SPa009	SAa02
12F区	F区 SP10	第3面	SPa010	SAa02
12F区	F区 SP11	第3面	SPa011	SAa02
12F区	F区 SP012	第3面	SPa012	SAa02
12F区	F区 SP013	第3面	SPa013	SAa02
12F区	F区 SP014	第3面	SPa014	SAa02
12F区	F区 SP015	第3面	SPa015	SAa02
12F区	F区 SP018	第3面以上	SPa016	
12F区	F区 SP019	第3面以上	SPa017	
12F区	F区 SP020	第3面	SPa018	SAa02
12F区	F区 SP021	第3面	SPa019	SAa02
12F区	F区 SP022	第3面以上	SPa020	
12F区	F区 SP023	第3面以上	SPa021	
12F区	F区 SP024	第3面以上	SPa022	
12F区	F区 SP025	第3面以上	SPa023	
12F区	F区 SP026	第3面以上	SPa024	
12F区	F区 SP029	第2か3面	SPa025	
12F区	F区 SP030	第3面以上	SPa026	
12F区	F区 SP031	第3面以上	SPa027	
12F区	F区 SP032	第3面以上	SPa028	
12F区	F区 SP033	第3面以上	SPa029	
12F区	F区 SP034	第3面	SPa030	SBa02
12F区	F区 SP035	第3面以上	SPa031	
12F区	F区 SP037	第3面	SPa032	SBa02
12F区	F区 SP038	第3面	SPa033	SBa02
12F区	F区 SP039	第3面	SPa034	SBa02
12F区	F区 SP040	第3面	SPa035	SBa02
12F区	F区 SP041	第3面以上	SPa036	
12F区	F区 SP042	第3面	SPa037	SBa02
12F区	F区 SP043	第3面以上	SPa038	
12F区	F区 SP044	第3面下位以上	SPa039	
12F区	F区 SP045	第3面下位以上	SPa040	
12F区	F区 SP046	第3面下位以上	SPa041	
12F区	F区 SP047	第3面下位以上	SPa042	
12F区	F区 SP048	第3面下位以上	SPa043	
12F区	F区 SP049	第1面以上	SPa044	
12F区	F区 SP050	第1面以上	SPa045	
12F区	F区 SP051	第1面以上	SPa046	
12F区	F区 SP052	第1面以上	SPa047	
12F区	F区 SP053	第1面以上	SPa048	
12F区	F区 SP054	第1面以上	SPa049	
12F区	F区 SP055	第1面以上	SPa050	
12F区	F区 SP056	第3面	SPa051	
12F区	F区 SP057	第3面以上	SPa052	
12F区	F区 SP058	第3面	SPa053	SAa02
12F区	F区 SP059	第3面以上	SPa054	
11H区	H区 SP001	第3面	SPa055	SBa05
11H区	H区 SP002	第3面以上	SPa056	
11H区	H区 SP005	第3面以上	SPa057	
11H区	H区 SP006	第3面以上	SPa058	
11H区	H区 SP007	第3面	SPa059	SBa04
11H区	H区 SP008	第3面	SPa060	SBa05
11H区	H区 SP009	第3面以上	SPa061	
11H区	H区 SP010	第3面	SPa062	SBa05
11H区	H区 SP011	第3面以上	SPa063	
11H区	H区 SP012	第3面以上	SPa064	
11H区	H区 SP013	第3面以上	SPa065	
11H区	H区 SP014	第3面	SPa066	SBa05
11H区	H区 SP015	第3面	SPa067	SBa04
11H区	H区 SP016	第3面	SPa068	SBa04
11H区	H区 SP017	第3面以上	SPa069	
11H区	H区 SP019	第3面	SPa071	SBa05
11H区	H区 SP020	第3面以上	SPa072	
11H区	H区 SP021	第3面以上	SPa073	
11H区	H区 SP022	第3面以上	SPa074	
11H区	H区 SP023	第3面以上	SPa075	
11H区	H区 SP024	第3面	SPa076	SBa04
11H区	H区 SP025	第3面以上	SPa077	
11H区	H区 SP026	第3面以上	SPa078	
11H区	H区 SP027	第3面以上	SPa079	
11H区	H区 SP028	第3面以上	SPa080	
11H区	H区 SP029	第3面以上	SPa081	
11H区	H区 SP038	第2面	SPa082	SBa01
11H区	H区 SP040	第2面以上	SPa084	
11H区	H区 SP044	第2面以上	SPa085	
11H区	H区 SP045	第2面以上	SPa086	
11H区	H区 SP046	第2面以上	SPa087	
11H区	H区 SP047	第2面以上	SPa088	
11H区	H区 SP048	第2面以上	SPa089	
11H区	H区 SP049	第2面	SPa090	SBa01
11H区	H区 SP053	第2面以上	SPa091	
11H区	H区 SP054	第3面以上	SPa092	
11H区	H区 SP055	第2面以上	SPa093	
11H区	H区 SP056	第3面以上	SPa094	
11H区	H区 SP059	第2面以上	SPa095	
11H区	H区 SP060	第2面以上	SPa096	
11H区	H区 SP061	第2面以上	SPa097	
11H区	H区 SP063	第2面以上	SPa098	
11H区	H区 SP065	第2面以上	SPa099	
11H区	H区 SP071	第2面以上	SPa100	
11H区	H区 SP072	第2面以上	SPa101	

第1表 造構番号対照表(1)

調査区	遺構名	掘り込み面	報告書 遺構名		調査区	遺構名	掘り込み面	報告書 遺構名	
11H区	H区SP073	第2面以上	SPa102		11H区	H区SP133	第3面以上	SPa160	
11H区	H区SP074	第2面以上	SPa103		11H区	H区SP134	第3面以上	SPa161	
11H区	H区SP075	第2面以上	SPa104		11H区	H区SP135	第3面以上	SPa162	
11H区	H区SP076	第2面以上	SPa105		11H区	H区SP136	第3面以上	SPa163	
11H区	H区SP077	第2面以上	SPa106		11H区	H区SP138	第3面以上	SPa164	
11H区	H区SP078	第2面以上	SPa107		11H区	H区SP139	第3面以上	SPa165	
11H区	H区SP079	第2面以上	SPa108		11H区	H区SP140	第3面以上	SPa166	
11H区	H区SP080	第2面以上	SPa109		11H区	H区SP141	第3面以上	SPa167	
11H区	H区SP081	第2面以上	SPa110		11H区	H区SP142	第3面以上	SPa168	
11H区	H区SP083	第2面以上	SPa111		11H区	H区SP143	第3面以上	SPa169	
11H区	H区SP084	第3面	SPa112	SBa03	11H区	H区SP144	第3面	SPa170	SAa03
11H区	H区SP085	第3面以上	SPa113		11H区	H区SP145	第3面	SPa171	SBa03
11H区	H区SP089	第2面以上	SPa117		11H区	H区SP149	第3面	SPa175	SAa03
11H区	H区SP090	第2面以上	SPa118		11H区	H区SP150	第3面	SPa176	SAa03
11H区	H区SP091	第3面以上	SPa119		11H区	H区SP155	第3面以上	SPa181	
11H区	H区SP092	第3面以上	SPa120		11H区	H区SP156	第3面以上	SPa182	
11H区	H区SP093	第3面以上	SPa121		11H区	H区SP157	第3面以上	SPa183	
11H区	H区SP094	第3面以上	SPa122		11H区	H区SP159	第3面以上	SPa185	
11H区	H区SP095	第3面	SPa123	SAa03	11H区	H区SP160	第3面以上	SPa186	
11H区	H区SP096	第3面以上	SPa124		11H区	H区SP164	第3面以上	SPa190	
11H区	H区SP097	第3面	SPa125	SAa03	11H区	H区SP165	第3面	SPa191	SBa03
11H区	H区SP099	第3面以上	SPa126		11H区	H区SP166	第3面	SPa192	SBa03
11H区	H区SP100	第3面	SPa127	SAa03	11H区	H区SP170	第2面	SPa196	SBa01
11H区	H区SP101	第3面以上	SPa128		11H区	H区SP171	第2面以上	SPa197	
11H区	H区SP102	第3面以上	SPa129		11H区	H区SP173	第2面以上	SPa199	
11H区	H区SP103	第2面以上	SPa130		11H区	H区SP174	第2面以上	SPa200	
11H区	H区SP104	第3面	SPa131	SBa05	11H区	H区SP175	第2面以上	SPa201	
11H区	H区SP105	第3面	SPa132		11H区	H区SP176	第2面以上	SPa202	
11H区	H区SP106	第3面	SPa133	SBa05	11H区	H区SP177	第3面	SPa203	SBa03
11H区	H区SP108	第3面	SPa135	SBa04	12F区	F区SK05	第2面	SPa204	
11H区	H区SP110	第3面以上	SPa137		11H区	H区SP003	第3面	SPa205	SBa05
11H区	H区SP111	第3面以上	SPa138		11H区	H区SP098	第3面	SPa206	SAa03
11H区	H区SP112	第3面以上	SPa139		11H区	H区SP041	第3面	SPa207	
11H区	H区SP113	第3面	SPa140	SBa05	12F区	F区SK01	第3面	SKa01	
11H区	H区SP114	第3面	SPa141	SBa05	12F区	F区SK02	第3面	SKa02	
11H区	H区SP115	第3面以上	SPa142		11H区	H区SP058	第2面	SKa03	
11H区	H区SP116	第3面以上	SPa143		11H区	H区SP082	第2面	SKa04	
11H区	H区SP117	第3面	SPa144	SBa05	11H区	H区SK01	第3面	SKa05	
11H区	H区SP118	第3面	SPa145	SBa05	11H区	H区SK04	第3面	SKa06	
11H区	H区SP119	第3面以上	SPa146		11H区	H区SK05	第2面	SKa07	
11H区	H区SP120	第3面以上	SPa147		11H区	H区SK06	第2面	SKa08	
11H区	H区SP121	第3面	SPa148	SBa05	11H区	H区SD01	第2面	SDa01	
11H区	H区SP125	第3面以上	SPa152		12F区	F区SD01	第2面	SDa01	
11H区	H区SP126	第3面以上	SPa153		12F区	F区SD02	第3面下位	SDa02	
11H区	H区SP127	第3面	SPa154	SBa04	11H区	H区SD02	第3面	SDa03	
11H区	H区SP128	第3面	SPa155		11H区	H区SD10	第3面	SDa04	
11H区	H区SP129	第3面以上	SPa156		12F区	F区SZ01	第2面	SZa01	
11H区	H区SP130	第3面以上	SPa157		12F区	F区SX01	第3面下位	SXa01	
11H区	H区SP131	第3面以上	SPa158		12F区	F区SX02	第3面下位	SXa02	
11H区	H区SP132	第3面以上	SPa159		12F区	F区SX03	第3面下位	SXa03	

第2表 遺構番号対照表(2)

遺構番号	遺物内容
SPa001	弥生1土師質1
SPa002	土師1
SPa003	弥生2土師質擂鉢1
SPa004	土師1須恵坏1
SAAa02-SPa006	土師2
SAAa02-SPa007	土師皿1
SPa016か017	土師質1
SAAa02-SPa019	土師5
SPa021	土師質1
SPa022	土師質1
SPa023	土師3土師質1須恵2
SPa029	土師1
SPa039	瓦器1土師質2
SPa040	備前?11
SPa041	土師坏1土師4土師質2
SPa042	土師3
SPa048	土師1
SPa051	土師2
SPa052	土師1
SAAa02-SPa053	弥生1土錐1
SPa056	土師3土師質3
SPa065	土師8
SPa05-SPa066	須恵1土師質2
SPa067	土師5瓦器1焼土2
SPa069	陶磁器1瓦器1土師2土師質3須恵1
SPa072	土師3土師質1
SPa074	平瓦1
SBa01-SPa062	平瓦3
SPa084	鉄製品1土師質2土師2陶器1
SPa085	土師1
SPa086	土師皿1
SPa087	土師皿2
SPa088	須恵陶1土師1
SPa091	土師3土師質2
SPa092	土師1
SPa093	備前1土師4
SPa095	土師2土師質1
SPa096	須恵2土師9土師質4青磁1
SPa100	瓦器1土師2
SPa101	土師1
SPa103	平瓦1備前1土師質2土師6
SPa104	土師2土師質1
SPa105	土師皿1他6土師質1
SPa107	須恵1土師2
SPa111	備前1須恵1土師5
SBa03-SPa112	須恵2
SPa113	古鏡1土師2土師質4
SPa117	須恵1土師皿1
SPa122	土師質1土師6
SAAa03-SPa206	須恵1
SPa128	土師3土師質2
SPa137	土師2
SBa05-SPa140	土師3土師質3瓦器1
SBa05-SPa141	土師質2
SPa142	土師質2土師2須恵1
SPa163	須恵1

遺構番号	遺物内容
SPa169	土師1
SPa183	土師3土師質2平瓦2
SPa185	土師6土師質2
SPa186	瓦器1土師1土師質3
SBa03-SPa191	土師9土師質3瓦器1
SPa201	土師1土師質1
SPa202	土師質1
SPa204	板1
SAa01	土師質土釜1他1須恵3丸瓦1平瓦5土 師15備前1
SKa01	平瓦2須恵陶1鍋1備前細1土師質 5土師15土師碗1皿2大皿?
SKa02	備前1須恵2平瓦1瓦器4土師質16土 師53褐色陶器7他1瀬美?白磁1
SKa04	土師質4土師3須恵2
SKa05	土師12土師質5須恵1
SKa06	土師1土師質1
SKa07	平瓦1土師質6土師3瓦器1
SKa08	平瓦3土師質5土師細2
SDa01	弥生3須恵鉢2他6瓦器5備前大甕2他 5土師質土釜6擂鉢1他76土師皿5他 135平瓦40丸瓦5軒丸2瀬美?2土製 品1磁器2竈1土錐1鉄製品4
SDa02	須恵器細1土師器細1
SXa01	平瓦4備前5龜山1須恵椀1壺1擂鉢1 瓦器6土師質土釜1他8土師49瓦質土 錐1陶器1
SXa02	瓦器7備前擂鉢3他5大土錐1土師質土 釜2他23須恵4平瓦2土師碗2皿2他 61丸瓦1鉄瓶1鉄塊1鉄滓1
SXa03	鉄滓1須恵3龜山2備前1瓦器3土師質 土釜2他20土師皿5壺1他68白磁1青 磁1土錐1
2層	陶器1
3層	巻貝1平瓦2丸瓦1竈1肥前磁器V期 1中国?磁器1
4·5層	平瓦7丸瓦1備前壺1土師質5土師6磁 器1瀬美折?綠皿1
4層	土師質1土師1
5層	土師質1土師1
6·7層	平瓦3丸瓦4備前?1土師質14肥前?磁 器1
8層	須恵1土師質3
8·9層	備前2龜山2土師質7土師10平瓦2
9層	鉄釘?1平瓦3瓦器6備前2土師20土師 質20丸瓦1
8·10層	須恵1瓦器1土師碗1他5土師質5白磁 II類1
10·11層	土師4土師質5
10層	平瓦1青磁1土師質2土師12土錐1
11層	須恵碗2他5瓦器10龜山2土師質土釜 3他72土師皿2他55土錐1備前1平瓦1
12層	龜山4中國染付12備前擂鉢1他7瓦 器12須恵9平瓦12土師質土錐1他2他 78土師皿1他102丸瓦2大土錐1土錐1 白磁1

第3表 遺構別出土遺物一覧

第5表 出土遺物観察表(2)

遺物 番号	種類・器種	通標名	発祥地	出土	色調	外面調査	内部調査	備考
20 20 19	肥前系?漆付?皿?	SDa01	J/8	~0.5mmの黒色砂粒を多量 (赤)灰白/S8	褐色系茶褐色、透明感。 (赤)灰白/S8	回転け・後施釉	回転け・後施釉	基面底
21 20 20	瀬戸美濃焼器・天目碗	SDa01	J/8	11.6 ~ 1mmの透明砂粒を多量	(赤)黄5YR3/4o (赤)黄5YR3/3	回転け・後施釉	回転け・後施釉	回転け・後施釉
22 20	陶器・碗	SDa01	小壺片	11.6 ~ 1mmの白色砂粒を多量	(赤)灰白/10YR5/4o (赤)灰白/25Y8/1	回転け・後施釉	回転け・後施釉	内外全面釉
23 20	陶器・皿	SDa01	小壺片	~1.5mmの透明砂粒を多量	(赤)灰白/75YR8/2	回転け?引り・回転け +後施釉	回転け?引り・回転け +後施釉	内外質入のある輪
24 20	陶器・器種不明	SDa01	小壺片	浅黄5YR8/3	貝殻模様青色、半透明感	回転け?引り	回転け?後施釉	傾き不確定
25 20 20	柴焼?碗?	SDa01	3/8	~1mmの白色砂粒を多量	(赤)赤黒2.5YR17/1o透明 (赤)赤2.5YR6/6	回転け・後施釉	回転け・後施釉	黒色釉
26 20 20	肥前系調理器?・丼付?	SDa01	小壺片	1~2mmの白色砂粒を少量	(赤)灰白5Y7/1(鉛)にぶ い5Y7/4(鉛)4	+後施釉	+後施釉	斜面
27 20 20	肥前系?陶器・丼付?	SDa01	小壺片	~1mmの白色砂粒を多量	(赤)灰白5YR4/6 (赤)灰白10YR7/3 N77	施釉	施釉	斜面の部品との接合 面
28 20	精前焼?陶器・灯明具	SDa01	J/8		(赤)灰白/5YR4/3(赤)灰白 10YR7/6	回転け・後施釉	回転け・後施釉	径不確定
29 20	土師器・小皿	SDa01	2/8	~0.5mmの白色砂粒を多量	相2.5YR7/6	回転け*	回転け*	
30 20	土師器・小皿	SDa01	小壺片	100 多量	1~2mmの白色砂粒 1mmの茶色砂粒を 黄褐色10YR8/4にぶ	回転け*、糸切り	回転け*	
31 20	土師器・灯明皿	SDa01	2/8	102 ~2mmの透明砂粒を多量	透黄5YR8/4、浅黄褐 (赤)透5YR7/8(外)透	回転け*	回転け*	口縁内一面に 煤
32 20	陶器・蓋付碗?	SDa01	J/8	93 3mmの茶色砂粒を多量	玉ガラ・指揮痕・施釉 75YR5/8	板け*	板け*	内外透明施釉
33 20	土師質・火鉢	SDa01	小壺片	~2mmの白色砂粒、褐色砂粒 1mmの金 黄母を多量	指揮痕・板け*	指揮痕・板け*	指揮痕・板け*	
34 20	土師質・土鍋?	SDa01	小壺片	~2mmの白色砂粒、~1mmの金雲母を 多量	相7.5YR7/6	玉ガラ・板け*	指揮痕・板け*	径不確定
35 20 22	鉄製品・小刀	SDa01	切先欠					側部分岐が厚く 形態不明
36 25	土師質土器・器種不明	SBa05		~2mmの透明砂粒を多量、~1mmの黒色砂 粒を少量	透黄5YR8/4	回転け*	回転け*	
37 26	精前焼・壺	SAa02- SPa014	小壺片	1~5mmの白色砂粒を多量、~1mmの透 明砂粒を少量	明赤灰2.5YR7/1(鉛) 透褐5YR5/3(鉛)25YR6/6 玉ガラ*	玉ガラ*	玉ガラ*	
38 27	陶器・蓋	SAa02- SPa003	小壺片	~1mmの白色砂粒、黑色砂粒を多量	玉10R5/4、暗褐色 10YR4/1(鉛)10R6/2	玉ガラ*	玉ガラ*	

遺物 標 番 号	圖 版	種類・器種	遺構名	疾存率	口径	胎土	色調	外圓壁経	内面観察	備考
39 27		肥前系磁器・碗	SPa62	小破片	精良	(灰)NS。(胎灰白)NS。 ^吳 原黃色	回転け ^ア 後施釉	回転け ^ア 後施釉	天地模様不鮮定	
40 29		土御質・土釜	SKa01	小破片	1~3mmの白色砂粒、1~2mmの透明砂粒・金雲母を多量	浅黄褐色SYTR8/3。茶色 SYTR8/4	++	板け ^ア 。	板け ^ア 。	
41 29		丸瓦	SKa01	3/8	径~2mmの白色砂粒を多量	青灰NS./灰NS./灰NS/ (胎灰質青色)。透明物。 (胎灰白)NS/	板け ^ア 後 ^ア 行	++	± ^ア 模	
42 30 19		中国産染付・皿	SKa02	1/8	精良		回転け ^ア 後施釉	回転け ^ア 後施釉		
43 31		土御器・杯	SKa06	小破片	1mmの白色砂粒	灰白10YR8/2	や削り ^ア 後 ^ア 行	回転け ^ア		
44 32		瀬戸美濃焼器・小皿	SDa02	1/8	10.2 砂粒を少量	(傳)清酒盃SY3.淡黄 SY7/3。(胎灰白)SY8/1. (傳)青磁釉 ^ア リ。灰 25G76/1。(胎灰)N6/	回転け ^ア 後施釉	回転け ^ア 後施釉	内外全面施	
45 33		陶器・土鍋		第1-2面 開整地層	小破片	16.4 精良	(傳)B5E5G78/1.胎灰 白25Y7/2	回転け ^ア 後施釉	回転け ^ア 後施釉	
46 33		陶器・甄?		第1-2面 開整地層	小破片	精良	青磁釉用器SY7/5G78/1. 胎灰白10YR8/2	回転け ^ア 後施釉。回 転け ^ア 削り	施施後地 ^ア 目地 ^ア 。“ 純” ^ア 目地ハギ	
47 33		肥前系?磁器・皿		第1-2面 開整地層	1/8	精良	(傳)灰白10YR7/2。(胎灰 白10YR8/1	回転け ^ア 後施釉。回 転け ^ア 削り	外底道道肌 ^ア 新 れ口に免け	
48 33 20		瀬戸美濃焼器・皿		第1-2面 開整地層	6/8	14.2 ~1mmの白色砂粒を多量	浅黄褐色10YR8/3.(内)淡 黄褐10YR8/4	回転け ^ア 板直重 ^ア 回転 け ^ア	全体堅城薄味 ^ア や 切りか不明	
49 33		土御器・小皿		第1-2面 開整地層	2/8	7.2 精良	浅黄褐色SYTR8/6	回転け ^ア 。糸切り	灯明皿。内面全体 に模	
50 33		土御器・灯明皿		第1-2面 開整地層	2/8	11.0 ~1mmの白色砂粒	(伝)灰青色10YR8/4.(外) 浅黄褐色10YR8/3	回転け ^ア 。板目模 回転け ^ア	糸切り後分 ^ア 仕 上げ	
51 33		土御器・杯		第1-2面 開整地層	2/8	精良				
52 33		土御器・杯		第1-2面 開整地層	2/8	8.4 ~1~2mmの白色砂粒を多量	浅黄褐色SYTR8/4	回転け ^ア		
53 33		土御質・罐鉢		第1-2面 開整地層	小破片	35.6 量	浅黄褐色10YR8/4	30ア ^ア 指揮追後 ^ア “ 板け ^ア ”後削目	往不確定。土蓋と 給土同じ	
54 33		陶器・大盆		第1-2面 開整地層	小破片	40.7 ~0.5~2mmの白色砂粒を多量	(傳)外端赤褐色SYTR8/4. (傳)内端褐色SYTR8/1	回転け ^ア 後施釉		
55 33		陶器・皿		第2-3面 開整地層	1/8	18.4 精良	(傳)透明釉胎灰白 25Y8/1	回転け ^ア 後施釉		
56 34		軒平瓦		第2-3面 開整地層	瓦当 完好	精良	灰M/	板け ^ア	指 ^ア 。板け ^ア	
57 34		櫛前焼・擂鉢		第2-3面 開整地層	小破片	~1mmの白色砂粒を多量	灰赤25YR6/2.灰赤 25YR5/2	板け ^ア	御目無立不明	

第6表 出土遺物調査表 (3)

測定 番号	測定 因 版	種類・器種	遺物名	形状	口徑	胎土	色調		外觀觀察	内観觀察	備考
							胎灰白NS。(側灰白 517.1	回転形・後施釉			
58 34	中国白磁・皿	新3面下 位	新好味	精良			(胎灰白NS。(側灰白 517.1	回転形・後施釉	回転形・後施釉	回転形・後施釉	臺付に砂状の物 付着
59 34	中国白磁・皿	新3面下 位	新好味	精良			(胎灰白NS。(側灰白 73Y7.1	回転形・後施釉	回転形・後施釉	回転形・後施釉	
60 34	梅口美濃器・皿	第3面下 位	小壺片	精良			(胎灰白25Y8.2。(側灰 黄25Y7.4	回転形・後施釉	回転形・後施釉	回転形・後施釉	底部切り離し技 法不明
61 34	土師器・小皿	新3面下 位	新好味	精良			浅橙10YR8/4	回転形	回転形	回転形	
62 34	土師器・小皿	新3面下 位	小壺片	精良			浅黃橙75YR8/6	回転形	回転形	回転形	
63 34	土師器・杯	新3面下 位	新好味	精良			淺黃橙75YR8/6	回転形	回転形	回転形	
64 34 22	銅金嵌飾品・器種不明	新3面下 位	余存	6.9							
65 34 22	銅金嵌飾品・器種不明	第23面 先存	調整地層								
66 34 19	中国產染付・瓶	新23面 调整地層	1/8	14.4	精良		胎灰白NS。透明釉青味 かぶら。側灰白517.1	回転形・後施釉	回転形・後施釉	回転形・後施釉	
67 34 18	中国產染付・皿	新23面 调整地層	1/8	14.2	精良		(胎灰白10YR8/2。(側灰 黄25Y8.2與原底色 白10YR8/8。明褐色 517.1R7.2與原底色 白10YR8/2。	回転形・後施釉	回転形・後施釉	回転形・後施釉	漳州產
68 34	中国產染付・瓶	新23面 调整地層	小壺片	精良			胎灰白NS。透明釉 (胎灰白NS。透明釉 白10YR8/2。	回転形・後施釉	回転形・後施釉	回転形・後施釉	外面文様難不明。 内外全面部
69 34 19	中国產染付・皿	新23面 调整地層	2/8	14.6	精良		(胎灰白NS。透明釉 白10YR8/2。	回転形・後施釉	回転形・後施釉	回転形・後施釉	
70 34	磁器・皿?	调整地層	小壺片	0.5mmの透明砂粒を少量			(胎灰白10YR8/1。(側灰 白10YR8/2。	回転形・後施釉	回転形・後施釉	回転形・後施釉	胎土に磁器の運 用感がなく薄る 外面部に細い網 覃くられる
71 34	中国產染付・皿	新23面 调整地層	2/8	13.4	~0.5mmの黒色砂粒を多量		(胎灰白NS。(側灰白 517.6/7.6	回転形・後施釉	回転形・後施釉	回転形・後施釉	
72 34	青磁・皿?	调整地層	小壺片	精良			(胎灰白NS。(側灰白 517.6/7.6	回転形・後施釉	回転形・後施釉	回転形・後施釉	
73 34	肥前系鍋器・刷毛目皿	新23面 调整地層	小壺片	~1mmの白色砂粒を多量			(胎灰白NS。(側灰白 517.6/7.6	回転形・後施釉	回転形・後施釉	回転形・後施釉	焼き、天地不明
74 34	肥前系鍋器・皿	新23面 调整地層	6/8	~1mmの白色砂粒を多量			(胎灰白25Y8.2。(側灰 白517.2。(底盤)517R7.6	回転形・削り後施釉	施釉、胎土2個所	胎土日	
75 34 20	肥前系鍋器・皿	新23面 调整地層	小壺片	~1mmの黑色砂粒を少量			(胎灰白NS。(側灰白 25Y8.2	回転形・削り後施釉	底盤不明。高台切れ 目。沙打留		
76 34 20	陶器・天目碗	第3面下 位	小壺片	12	精良		(胎灰白5YR3.3o	回転形・後施釉	回転形・後施釉	回転形・後施釉	
							(胎灰白25Y8.1				

遺物・構造 番号・図版	種類・器種	遺物名	保存率	口径	出土	色調	外面調査	内部調整	備考
77 34	陶器・碗	第23面 側面地層	1/8	~1mmの透明砂粒を多量	(側)灰白5Y7/2, 陶灰白 10YR8/2	回転 ⁺ 後輪轍	回転 ⁺ 後輪轍	内外面全体輪轍	
78 34	陶器・碗?	第23面 側面地層	小壺片	~1mmの透明砂粒を多量	(側)灰白5Y7/1。(側)黄5Y K7/6	回転 ⁺ 後輪轍	回転 ⁺ 後輪轍	施工が始まる前からして文様は 透かして文様は	
79 34	陶器・壺?	第23面 側面地層	小壺片	~1mmの透明砂粒を多量	(側)灰白10YR2/1, 灰質陶 10YR4/2, 陶灰白25Y7/1	回転 ⁺ 後輪轍	回転 ⁺ 後輪轍	施工が ⁺ 後輪轍	天地不明
80 34	陶前焼・皿	第3面下 位	1/8	9.1 ~1mmの透明砂粒を多量	内に灰い赤陶25YR5/4 外に灰い赤陶5YR6/4	回転 ⁺	回転 ⁺		
81 34	陶前焼・壺?	第3面下 位	1/8	~1mmの透明砂粒を多量	外に灰い赤陶5YR5/3。	回転 ⁺	回転 ⁺ 後輪轍	回目8本+単位	
82 34	土師質・壺	第23面 側面地層	小壺片	~1mmの金糸状を多量1~2mmの白色 砂粒を中量	外清音7.5YR8/6, 内 色7.5YR7/6	板 ⁺ 。玉け ⁺	板 ⁺ 。玉け ⁺	ヨリ ⁺ 板 ⁺ 。板 ⁺ 後脚	焼き不確定
83 34	土師質土器・火鉢	第23面 側面地層	小壺片	~2mmの白色砂粒1mmの金糸母	浅黄7.5YR8/4	板 ⁺ 神印	板 ⁺	点線円文を押印	
84 34	軒焼瓦	側面地層	小壺片	1~2mmの白色砂粒を多量	白25Y7/1			刻印有り ⁺ △斜 切	
85 34 21	陶器・器種不明	第23面 側面地層	小壺片	精良	白5Y7/2	板 ⁺ 後輪轍	板 ⁺	厚い板状。柔い 刻みを等間隔	
86 34	土師質・土瓶	側面地層	8/8	1.1 ~0.5mmの砂粒を多量	浅黄7.5YR2/3, 灰白 10YR8/2	ナ ⁺	ナ ⁺		
87 34	土師質・土瓶	側面地層	8/8	5.0 ~1mmの砂粒を少量	白5Y7/4	ナ ⁺	ナ ⁺	縁に巻き付け焼形	
88 34	土師質・土瓶	側面地層	8/8	1.7 0.1~0.2mmの白色砂粒を少量~0.1mm の黒色砂粒を少量	白5Y7/4	指腹裏後 ⁺ 。ナ ⁺	指腹裏後 ⁺ 。ナ ⁺	片側ずつ工具先 で押さえ入れ	
89 34 22	新製品・器種不明	側面地層	鋼						
90 35	中国青磁・碗	第3面下 位	小壺片	審	(側)灰白5Y7/1(側)灰白7/2	施油	施油		
91 35	中国?漆付・碗	第3面下 位	小壺片	精良	(側)灰白N.S.(側)青灰 N.S. 兵須	回転 ⁺ 後輪轍	回転 ⁺ 後輪轍	焼き不確定	
92 35	中国磁器・皿	第3面下 位	小壺片	1.8 10.6 精良	(側)灰白N.S.(側)青灰 5Y7/1, 外灰白10YR8/1	回転 ⁺ 後輪轍	回転 ⁺ 後輪轍	施工 ⁺ 後輪轍	
93 35	肥前系製器?・皿	第3面下 位	小壺片	精良	(側)灰白5Y7/1。(側)青灰 5Y6/2	回転 ⁺ 後輪轍	回転 ⁺ 後輪轍	焼き不確定	
94 35 20	肥前系製器・皿	第3面下 位	2/8	14.0 ~2mmの白色砂粒を少量	側面銀熱帯7.5Y6/1 10YR4/2, (側)青灰5Y6/1	回転 ⁺ 後輪轍	回転 ⁺ 後輪轍	施工 ⁺ 後輪轍	
95 35	漆器・天目碗	第3面下 位	小壺片	精良	白5Y7/4	回転 ⁺ 後輪轍	回転 ⁺ 後輪轍		

第6表 出土遺物調査表 (5)

第9表 出土遺物観察表 (6)

遺物 番号	図版	種類・特徴	遺跡名	発祥年	口径	胎土	色調	外面装飾	内面装飾	備考
96	35	陶器・器蓋不明	新3面下 位	小壺片	精良	~1.5mmの白色砂粒を多量1mmの暗茶 砂粒を少量	(陶)灰白10YR8.1, 黒灰 2.5TR8.1	同上	同上	傾き不確定 流状文並用 径不確定
97	35	信前焼・壺	新3面下 位	小壺片	精良	1~3mmの白色砂粒を多量1mmの暗茶 砂粒を少量	にぶい赤褐色2.5TR5.3, 黑 9.5TR6.1	同上	同上	後施釉 回転け・後施釉
98	35	信前焼・壺	新3面下 位	小壺片	2.8	100 3~5mmの砂粒を多量	透明灰2.5TR5.6, 外 明褐色5TR5.4	同上	同上	同上
99	35	信前焼・壺	新3面下 位	小壺片	428	1~3mmの白色砂粒を多量1~3mmの暗 紫砂粒を少量	にぶい赤褐色2.5TR5.3, 黑 25YR1.0, 透明灰7.5TR7.1	同上	同上	自然釉
100	35	信前焼・壺	新3面下 位	小壺片	2.8	精良	外壁2.5mmの砂粒を少量	灰褐色2.5TR5.4/2	同上	同上
101	35	信前焼・大平底	新3面下 位	小壺片	径2mmの白色砂粒を少量	内灰褐色2.5TR4.2	同上	同上	同上	同上
102	35	信前焼・壺	新3面下 位	小壺片	径2mmの白色砂粒を少量	内灰褐色2.5TR4.2, 外に 5mmの赤褐色2.5TR5.4/3	同上	同上	同上	同上
103	35	土師質・壺	新3面下 位	小壺片	13.5	径2mmの白色砂粒1mmの金星母 砂粒を少量	板7.5TR7.6	指押さえ後打*	板け・後打*	5本以上1単位の 朝日
104	35	土師質・壺	新3面下 位	完存	13.5	~1mmの透明砂粒を多量1~1mmの白色 砂粒を少量	透徹性10YR8.4, 黑白 2.5TR8.1	ガ・指押痕後打*	ガ*	
105	35	土師質・土釜	新3面下 位	小壺片	335	径2mmの白灰白色砂粒	透徹性10YR8.4	横打*	板打*	
106	35	土師質・土釜	新3面下 位	完存	4.4	4.4 mmの白色砂粒	にぶい赤褐色2.5TR5.4	ガ*	ガ*	
107	35	土師質・土釜	新3面下 位	完存	5.7	径2mmの白色砂粒	灰白10YR8.2, 黑黄褐 10YR5.2	ガ*	ガ*	
108	35	土師質・土釜	新3面下 位	完存	26	径2mmの白色砂粒	にぶい黒7.5TR5.4	ガ*	ガ*	
109	35	銅製品・鉈?	新3面下 位	完存?						下に先細り。上端 は楕円形がある。
110	36	土師器・小皿	壺	完存	78	1~2mmの透明砂粒1mmの白色砂粒	透徹性7.5TR8.4, にぶい 砂粒7.5TR7.4	同上	同上	作りが全体にやや 粗糙な印象。
111	36 21	土製品・器體不明	壺	完存	1612	径2mmの白色黒色砂粒を多量	にぶい黒7.5TR6.4			断面5面の面取り
112	36	軒焼瓦	壺	小壺片	1mmの白色砂粒	ガ? 黒5Y3.1	板打*	板打*	刻印有り	
113	36 21	軒平瓦	壺	完存	11.3	径1~2mmの白色砂粒	灰N4/	板打*	板打・指打*	
114	36 22	石製品・壺	壺	完存	1612		灰10Y4.1			朱らしきもの付着



12F区調査終了（北より）



12F区調査終了（北より）

図版2



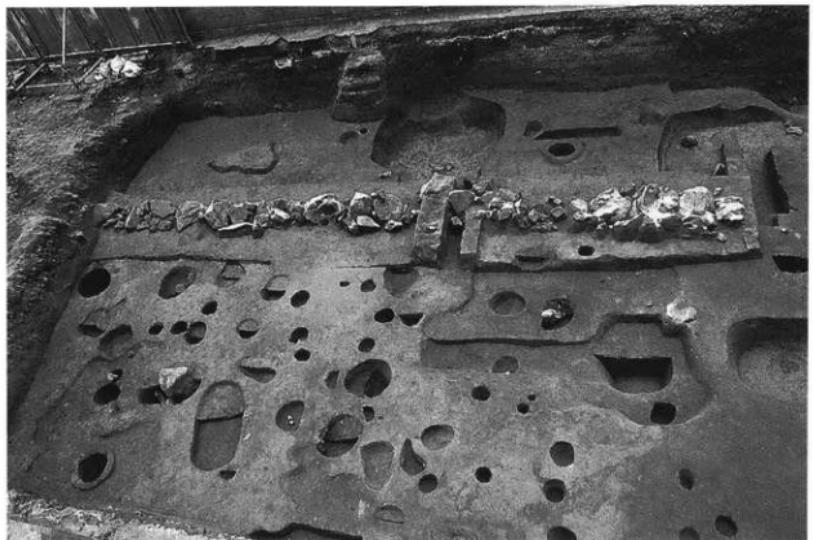
12F区遺構完掘（東より、SDa01より東部分）



12F区 S A a01及び標高0.7mでの遺構検出状況（東より）



11H区第2面調査終了（西より、中央部分）



11H区第2面調査終了（西より、中央部分）



11H区第2～3面遺構完掘（西より）



11H区第3面遺構完掘（東から）



11H区第3面下位完壊状況（西より）



11H区東壁土塁（南端部分）



12F区 S A a01土層断面（南東より、後方杭残存検出）



11H区 S P a190・106磁石等状況（西より）



12F区 S P a204 土層断面（南より）



12F区 S P a204 横石検出（北より）

図版8



11H区 S P a03土層断面（南より）



11H区 S K a03土層断面（西より）



12F区 S D a01土層断面①（北より）



12F区 S D a01土層断面②（北より）



12F区 S Da01土層断面③（北より）



11H区 S Za01調査風景（南より）



11H区 S Z a01とS K a08との共存関係（南より）



11H区 S Z a01とS K a08との共存関係（南より）



11H区 S Z a01前面石崩落状況（南より）



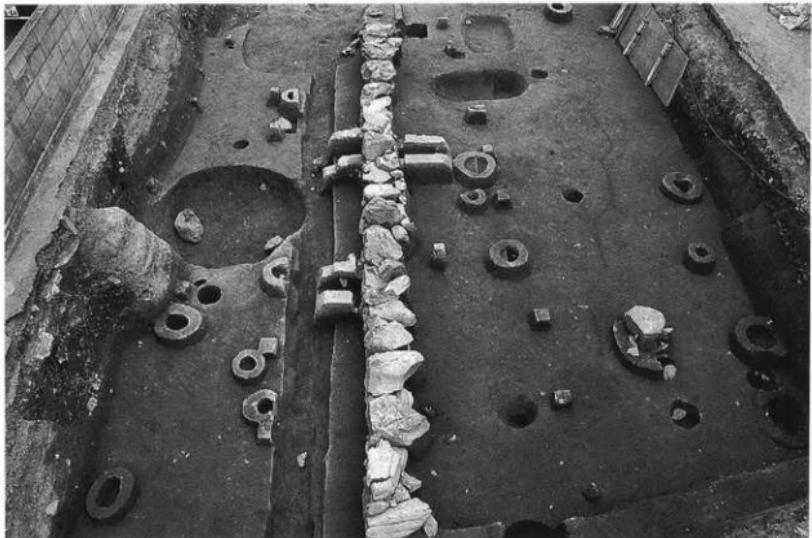
11H区 S Z a01石積み状況（東より）



11H区 S Z a01北端部（南西より）



11H区 S Z a01裏込め石状況（北より）



11H区 S Z a01（北より）



11H区 S Z a01第2面整地後状況（北より）



12F区 S Z a01石抜き取り後埋土（南より）



11H区 S P a183柱痕検出（西より）



11H区 S P a068詰め石検出（南西より）



11H区 S P a068詰め石・根石状況（西より）

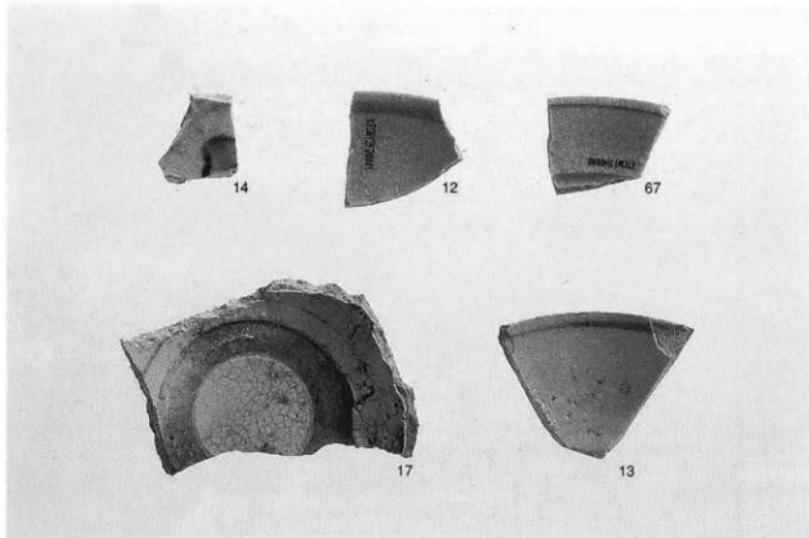


11H区 S Da04立面（西より）

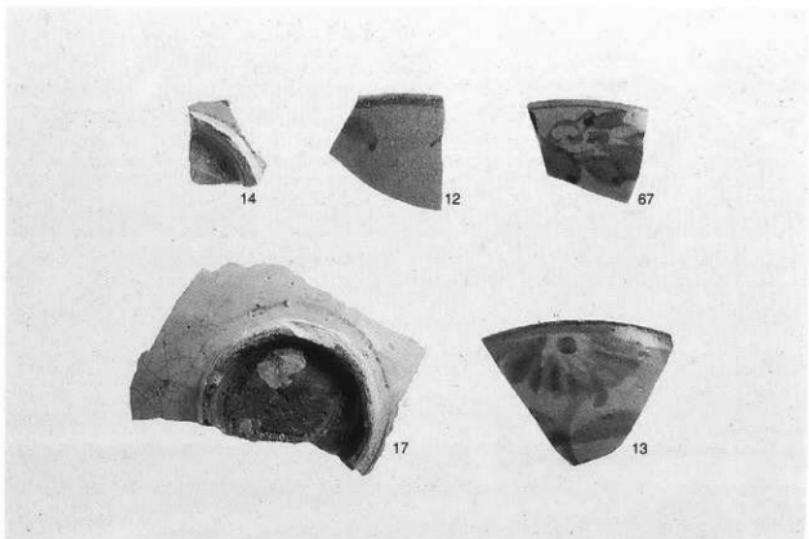


11H区 S Da04立面（西より）

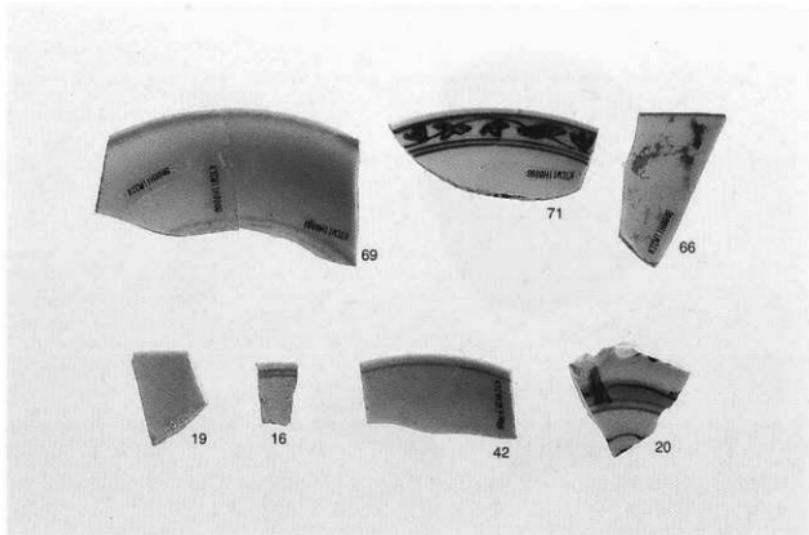
图版18



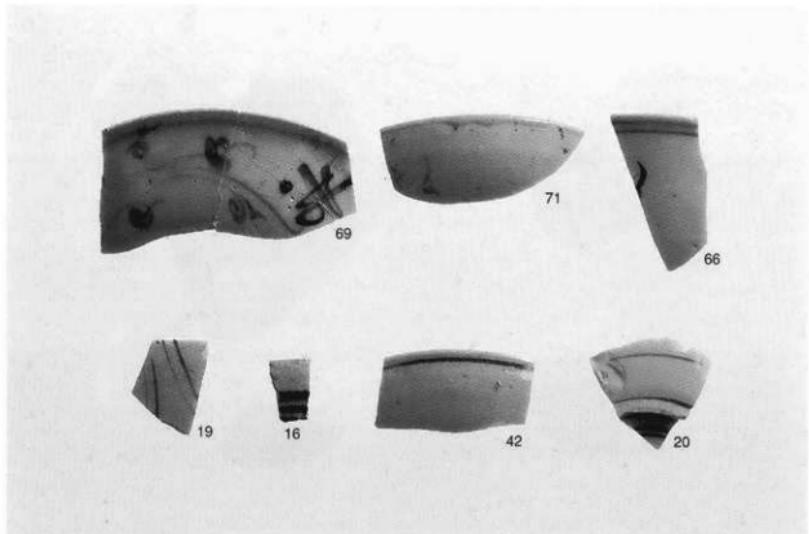
出土遗物 (1)



出土遗物 (2)

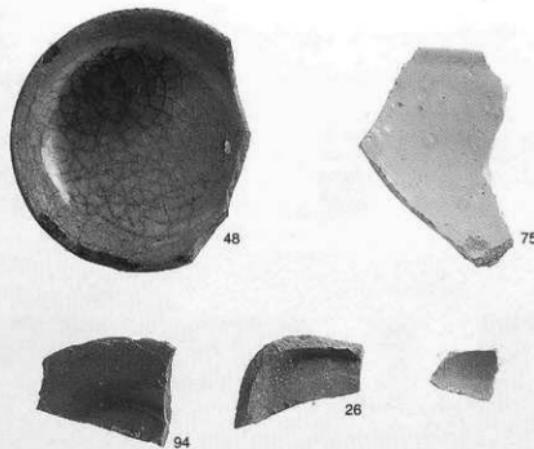


出土遺物 (3)

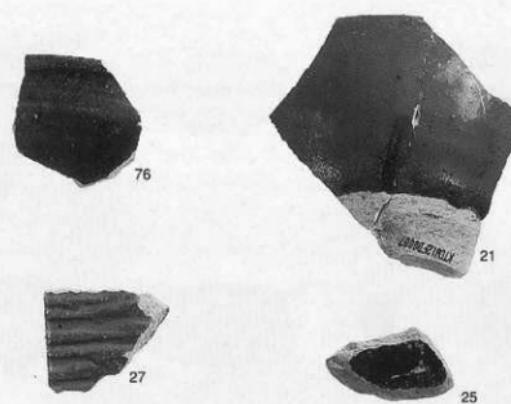


出土遺物 (4)

图版20



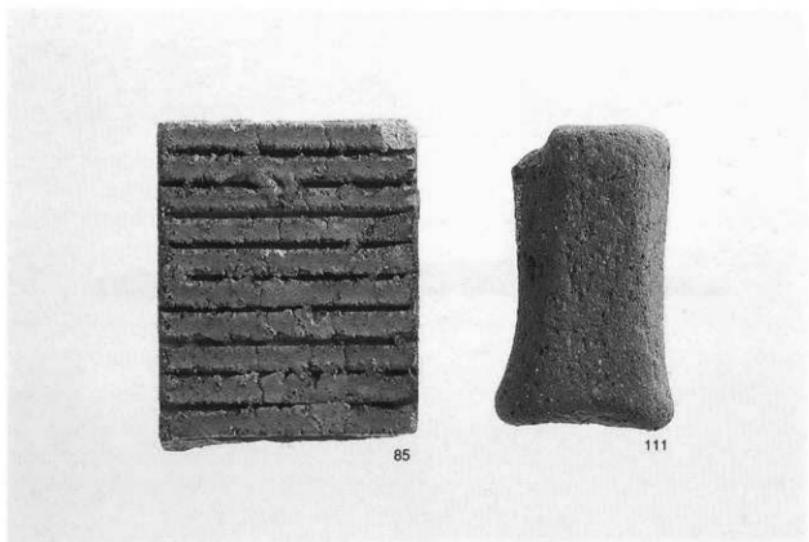
出土遗物 (5)



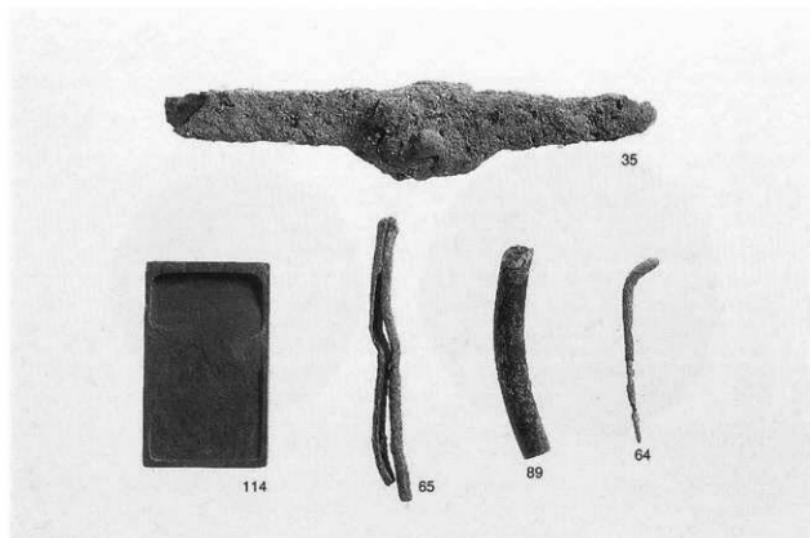
出土遗物 (6)



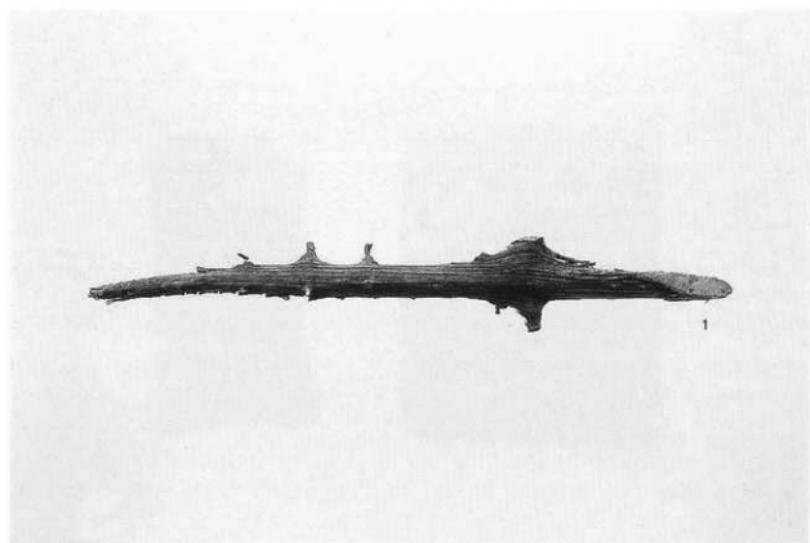
出土遺物（7）



出土遺物（8）



出土遗物 (9)



出土遗物 (10)

報告書抄録

ふりがな	たかまつじょうあと（にしのまるちょううちく）いち						
書名	高松城跡（西の丸町地区）I						
副書名							
卷次							
シリーズ名	サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告						
シリーズ番号	第3冊						
編集者名	古野徳久						
編集機関	財団法人香川県埋蔵文化財調査センター						
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷 5001-4 TEL: 0877-48-2191						
発行機関	香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター						
発行年月日	西暦2001年8月31日						
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数	
76頁	14頁	34頁	6頁	22頁	36枚	44枚	
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	市町 遺跡						
たかまつじょうあと 高松城跡 (西の丸町地区)	香川県高松市 西の丸町 11番3号外	37201	一	34度 20分 46秒	134度 3分 00秒 ~ 19990401 19990623 20001127 ~ 20001222	390m ² 280m ²	サンポート高 松総合整備事 業に伴う事前 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
高松城跡 (西の丸町地区)	屋敷跡	江戸時代	掘立柱建物群、石積み遺構、 柵列、溝、石組み溝	陶器、磁器、瓦		遺構面を3 つに区分	

サンポート高松総合整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告
第3冊

高松城跡（西の丸町地区）I

平成13年8月31日発行

編集 財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
香川県坂出市府中町字南谷5001番の4
電話（0877）48-2191（代表）
発行 香川県教育委員会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
印刷 太陽印刷株式会社

